

出水の景観を 守り育てるために

～出水の景観資源～



平成20年2月
出水市

目次

はじめに	1
1. 出水市のすがた	2
2. 出水市の景観資源	21
3. 出水の景観を守り育てるために（景観形成の方向性）	47
4. 他地域の事例（参考）	51

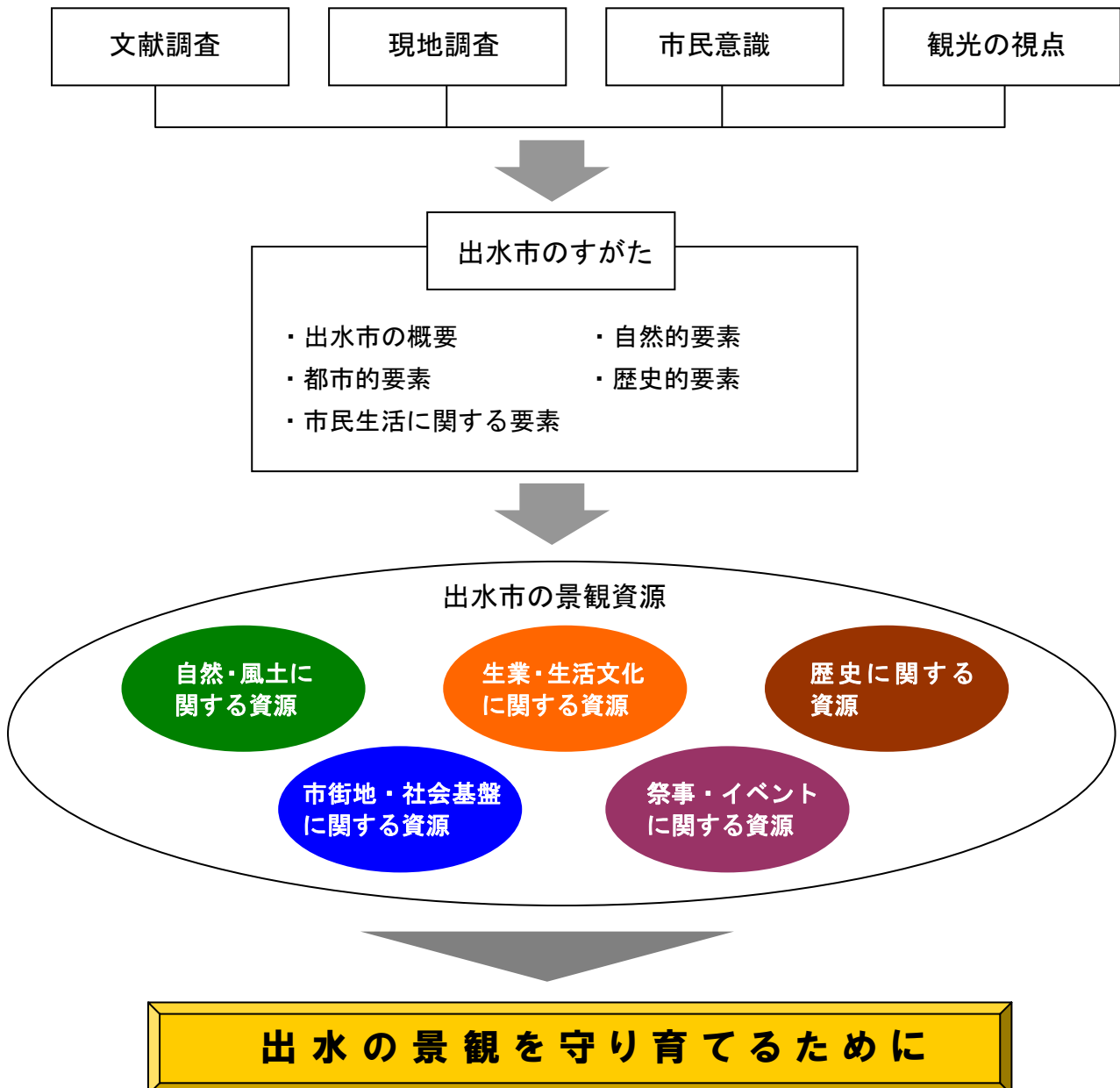
はじめに

出水市には、優れた景観を持ち、市民に親しまれている場所が多々あります。これらは、今後の景観まちづくりを考える上で貴重な景観資源として、保全活用することが求められます。景観資源とは、景観を優れたものにする事物。あるいは、景観形成の際に重要だと思われる資源をいいます。

景観は、市民がイメージとして共有化することにより、まちの個性の創出、愛着や誇りの醸成につながるものと考えられます。このため、市民が現在、及び将来の出水をイメージする時の共通のバックボーンとなる都市の景観構造や景観形成のあり方を明確にする必要があります。

出水市の特徴を自然、歴史、社会などの面からひもとき分析し、出水らしさをつくりだしている景観資源を抽出し、今後出水市のまちづくりにおいて大切にしたい景観をまちのアイデンティティとして守り育てていくための方策について検討を行います。

■調査の流れ



1. 出水市のすがた

1-1. 出水市の概要

(1) 位置及び面積

出水市は、鹿児島県の北西部“北薩地域”に位置する。西に阿久根市、南に薩摩川内市、さつま町、東に大口市、北東を熊本県水俣市に接し、鹿児島市と八代市のほぼ中間に位置する。

北部は八代海（不知火海）に面しており、東部は矢筈岳を主峰とする肥薩山脈が北東に走り、南部は紫尾山を中心とする紫尾山系が東西に伸びる。

市域の大半は山地と扇状地であり、米ノ津川とその支流の平良川、高尾野川、野田川がそれぞれ北西流して八代海（不知火海）に注ぐ。

東西約 27km、南北約 23km、市の面積は 330.06k㎡となっている。（出水地区 228.31k㎡、高尾野地区 71.15k㎡、野田地区 30.6k㎡）

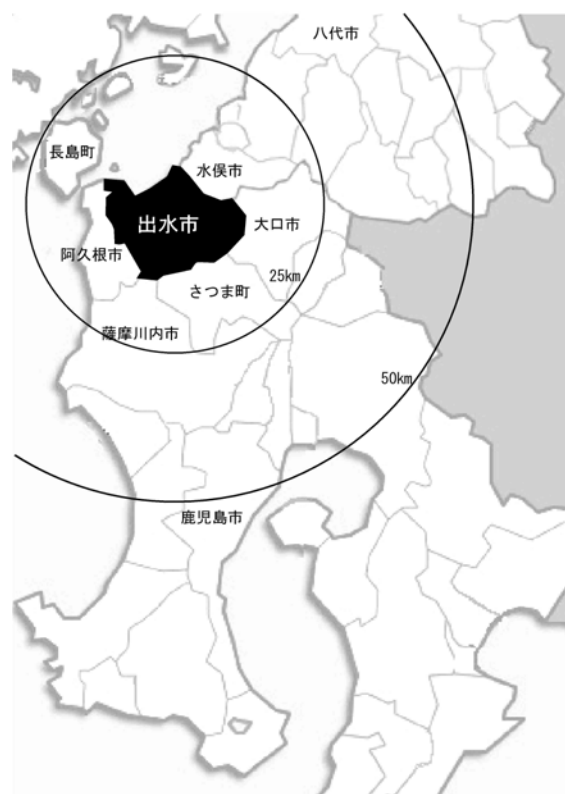


図 出水市とその周辺位置図

(2) 各地区の沿革および平成の大合併

旧出水市は、昭和 29 年 4 月に出水町と米ノ津町が合併(同年 10 月に大川内村が編入合併)して発足した。

旧高尾野町は、昭和 7 年 4 月に町制施行され、高尾野村から高尾野町となった。その後、出水市の一部を編入し、昭和 34 年 4 月に江内村と合併した。

旧野田町は、かつて野田郷と呼ばれており、村制を経て昭和 50 年に町制施行され、野田町として発足した。

平成 18 年 3 月 13 日、これらの 1 市 2 町が合併して新「出水市」が誕生した。

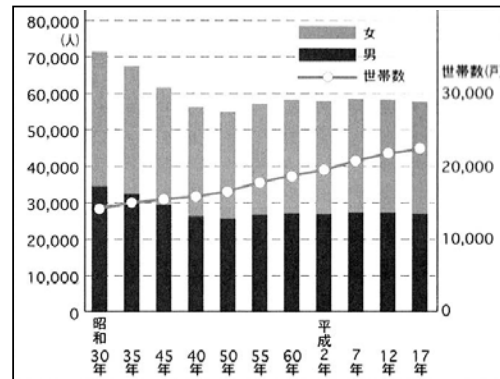
出水市の沿革

区分		1884	1889	1891	1915	1938	1949	1953	1954	1955	1959	1975	2006
郡名	外城時代	明治17年	明治22年	明治24年	大正4年	昭和13年	昭和24年	昭和28年	昭和29年	昭和30年	昭和34年	昭和50年	平成18年
出水郡	出水郡	武本村	上出水村			出水町(大正6年~)			出水市				
		下知識村											
	武本村	上出水村	大川内村										
	下知識村	中出水村				米ノ津町(大正12年)							
	脇本村	下出水村				三笠村(大正13年~)	江内村		高尾野町				
	江内村												
	高尾野郷	柴引村	高尾野村			高尾野町(昭和7年~)							
野田郷(1857年出水郡防から分離)	上名村	野田村										野田町	

(3) 人口規模及び他都市との比較

総人口は、57,757人、世帯数は24,081世帯（平成20年1月現在・住民基本台帳より）。過去50年の推移（旧高尾野町、旧野田町含む値）を見ると、人口は昭和30年をピークに昭和50年まで減少が続いた後、昭和60年から現在までほぼ横這いに推移している。一方で世帯数は微増を続けている。なお、鹿児島県全体では人口が減少傾向にあることを踏まえると、県内の他市（阿久根市、いちき串木野市、垂水市、名瀬市など）と比べ急激な減少ではないことがうかがえる。

年次	世帯数	人口			1世帯 当たり の人員
		総数	男	女	
昭和30年	14,560	71,355	34,482	36,873	4.9
35年	15,317	67,483	32,359	35,124	4.4
40年	15,865	61,723	29,242	32,481	3.9
45年	16,220	56,289	26,245	30,044	3.5
50年	16,941	55,006	25,600	29,406	3.2
55年	18,216	57,279	26,665	30,614	3.1
60年	19,152	58,402	27,044	31,358	3.0
平成2年	19,909	57,962	26,823	31,139	2.9
7年	21,196	58,655	27,342	31,313	2.8
12年	22,222	58,460	27,309	31,151	2.6
17年	22,839	57,907	26,922	30,985	2.5



図表 出水市の世帯数・人口の推移（出水市市勢要覧2007より）

(4) 産業

出水市の産業別就業者数は、27,823人で、うち第一次産業16.5%、第二次産業27.7%、第三次産業55.6%となっている（平成17年度国勢調査より）。第一次産業は減少傾向にあり、そのほとんどが農業の従事者である。耕地面積や農家人口の推移からもその傾向が著しいことが分かる。

① 農林業の特色

出水平野一帯の農業は、平地を利用した稲作が多くを占める。ツルが飛来する干拓地には広大な田園景観が広がっている。出水市の生産状況を見ると、生産量が約4千トン、生産額が約12億円という状況。市では、「味の良い米」「品質の良い米」を作るために、ヒノヒカリ、コシヒカリを中心とした生産を進めている。また、河川の上流部では、山間の地形を利用した畑がみられ、豊富な野菜類が生産され、山麓部にはみかん園を主体とする常緑果樹園がみられる。

米ノ津では、日当たりのよい山の斜面を利用したみかん作りが盛んである。水はけがよく養分を含んだ目の粗い土で、不知火海から暖かい潮風が吹き上げ、また日照時間が長く、霜があまり降りないことから、みかん作りに適した気候とされる。

植木や苗木の生産農家も多く、長い歴史がある。下大野原の大野原・石崎線の道路そばに「出水苗木発祥の地」という碑が立っている。明治35年に、前田次郎郎・古賀新三郎等の人々によって、初めて苗木栽培が始められたことが記されている。現在は全国や中国などの海外に販路を広げつつある。

②水産業の特色

出水市では、ほとんどが近海漁である。名護の市場には、エビ・貝の他にマダイ・ヒラメ・ハモ等の高級魚も水揚げされる。

出水市北西に広がる八代海では、11月頃から白い帆を張ったケタ打瀬船の姿が見られる。この船は300年の歴史があり、漁法としては、海の底を船で網を曳きながら漁をする「底曳網漁法」で行われ、昔から変わらずこの方法で行われている。

また、米ノ津付近の海は、遠浅のため海苔の養殖には最適と言われている。出水で生産しているのは「出水アサクサノリ」と呼ばれ、なめらかで光沢があり質が高い。しかしながら、後継者問題や生産のための費用高騰により、生産額は年々減少する傾向にある。

川漁業としては、米ノ津川などのアユ漁が盛んで、コイ、ウナギ等の稚魚の放流も行っている。親水護岸整備が進む米ノ津川のアユ漁は6月の第1日曜日が解禁日で、漁業としてばかりではなく一般の人々も多く参加する出水の行事のひとつになっている。

③商工業の特色

かつては、地元商店街を核とした市街地のにぎわいがあったが、国道沿道のロードサイド商業施設の立地や市外への買物行動などもあり、商業の形態が変わりつつある。

商業は、近年まで出水地区商店街、米ノ津地区商店街、西出水地区商店街の3つの商店街を中心に営まれてきたが、現在の市の商業の発展は市外から進出してきた企業に支えられている。大型店舗やチェーン店組織をもつ企業の進出が進み、国道328号線の沖田付近を中心に新店舗の進出が目覚しく、年々その様子を変えている。

一方で、製造業は焼酎等の地場産業とともに最先端技術産業の進出（NEC、ヤマト電子等）もあり、5,000人程度の従事者がいる。2011年に全線開通が予定されている九州新幹線鹿児島ルートや鹿児島市内と熊本県八代市を結ぶ南九州西回り自動車道など、高速交通網の整備が進み出水市の企業誘致環境はさらに整いつつある。

(5) 交通

広域的な道路では九州の基幹をなす国道3号（北九州～久留米～熊本～出水～鹿児島）、国道447号（出水～大口～えびの）、国道328号（出水～さつま～鹿児島）、国道504号（出水～さつま～霧島）があり、国道3号へのアクセス強化のため国道328号が整備されている。また、南九州西回り自動車道の整備が計画されており、それにより九州の主要都市への旅行時間が大幅に短縮されることになる。国道3号と国道328号の交通量が比較的多いもの目立った混雑箇所はない。

また、市内には肥薩おれんじ鉄道の駅が5つある。さらに、九州新幹線の出水駅が設置されたことで、鹿児島市、福岡市等の大都市への移動が容易になり、2011年の九州新幹線の全線開通においては、周辺市町村の拠点都市としての位置づけが高まることが期待できる。

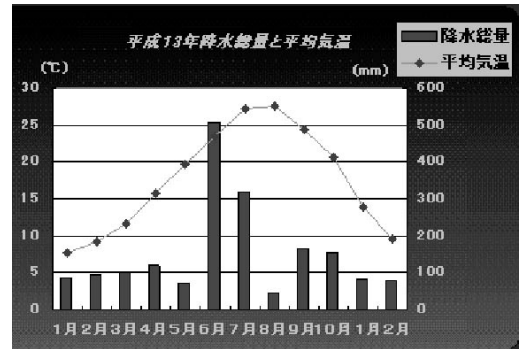
○出水市から周辺主要都市等からの自動車による時間距離					
出水市	－	八代市（おおよそ1.5時間）	出水市	－	鹿児島市（おおよそ1.5時間）
出水市	－	熊本市（おおよそ2.5時間）	出水市	－	福岡市（おおよそ3.5時間）

1-2. 自然的要素

(1) 気候・季節

県北西部で八代海に面していることなどから、年平均気温は 17.0° C と県南部の鹿児島や指宿に比べるとやや低く、降水量は6～7月の梅雨時に多く、海洋型と内陸型の2つに大別できる。海洋部は、暖流に接することにより無霜地帯でもあり、農作物にとってよい環境とも言え、ツルが飛来する一因となっているとも言われている。

また、台風の影響を受けやすく、毎年、通過する台風には注意が必要な地域である。



出水市の降水量、気温

(2) 地形・地質

地形は、東南部に発達する山地と西部の平野に大きく区分される。山地帯となる市域東部は、矢筈岳 (687m) を主峰とする老年期の肥薩山脈、紫尾山 (1,067m) を主峰とする壮年期の紫尾山系からなり、標高は 200m から 1,000m となっている。

西側は、この紫尾山系に源を発する米ノ津川や平良川、高尾野川に運ばれた土砂により山麓部には扇状地が発達し、河口にはこれらの河川による沖積平野と江戸時代～近代にかけての水田開発に伴う干拓地による現在の出水平野が形成されている。

平野部背後の山麓部には、扇状地が発達しているため地表水は少なく、山地部に降った雨は伏流水となっている。出水市の西南部に広がる大野原町 (扇状地) の地下水位は、深いところで地表面から約 10m、浅いところで地表面から 2～3 m と大隅半島鹿屋笠之原台地の 70～80m に比較すると、いたって浅いことが特徴であり、かつては、扇端部のいたるところに湧水が見られた。“出水” という地名もこの湧水の豊かさに由来するという説もある。

地質は、中～古生代の堆積岩類および第三紀の火山岩類の基盤に、始良・阿蘇火砕流の堆積物、扇状地堆積物及び沖積堆積物が被覆したもの。



図 出水市の概略地形図および断面イメージ

(3) 水系・海

矢筈岳や紫尾山から市域の中央を東から西へ流れる米ノ津川水系及び、主に紫尾山系より干拓地に注ぐ、高尾野川水系に大別できる。また、主に米ノ津川流域に農業用のため池が点在する。海岸線は、江戸時代からの度重なる干拓地整備と漁港整備により、多くの自然海岸が失われ、現在は、蕨島外周と市北部の切通から櫛木の地域に部分的に自然海岸が残るのみとなっている。また、高尾野川河口と蛇淵川河口には干潟が広がっており、湿地帯の名残である沼沢地があり、多様な生物の生息域であり、それらを餌とするたくさんの水鳥にとって貴重な生息の場となっている。



出水市の水系現況図

(4) 温泉

市内では自然湧出の温泉が各地に多くあり、市内外の多くの人に利用されている。特徴としては、温度が低く、湯量は降雨量に影響を受けるといわれている。

主な温泉地としては、山間部には、白木川内温泉や折尾野温泉、湯川内温泉などが立地し、市街地や集落近くでは、高尾野温泉センターや若宮温泉、舞鶴温泉などをはじめ、多くの施設が立地している。

(5) 生物・植物

①ツル

特別天然記念物「鹿児島県のツル及びその渡来地」があり、荒崎地区を中心に、毎年秋から冬にかけて、約 1 万羽のナベヅルとマナヅルが越冬のためシベリア方面より飛来する。これまで出水地方で確認された鳥類は文献や個人の観察記録から、これらのツルを含み、286 種に及んでいる。

ツルの越冬期間は、約 5 か月間（10 月～12 月に飛来、翌年 2 月～3 月に北帰行）である。本市に飛来するツルは、昭和 2 年より記録されており、途中、第二次世界大戦や戦後の復興時期に激減したが、昭和 30 年代半ば頃より徐々に回復し、平成に入ってから概ね毎年 1 万羽前後を記録している。出水で多く見られるナベヅルとマナヅルは、シベリア東部の湿原や沿海州のアムール川周辺で繁殖している。

その一方で、こうして年々増加するツルの飛来数に対し、農作物被害や伝染病による絶滅の危惧等の問題が指摘されており、ツルの農作物被害に対する対策、病気、行動特性及び安全保障に関する研究調査を行っている。

(干拓地とツル)

出水の干拓は江戸時代の初期からつぎつぎに整備され、現在では 1,000 ヘクタールを越す水田となっている。もともと出水の海岸は有明海の南端に位置し、遠浅で干満の差が大きく、北西の風が恒に吹くことから干拓の適地であった。

近世初期には出水の海岸の湿地帯各所にツルは渡来していたようであるが、海岸の開発が進むにつれ、だんだんと渡来地が限られてきているといわれている。

荒崎地区の田園は江戸中期の干拓地であるが、干拓堤防を破損したまま、約 100 年間幕末まで放置されており、ツルの渡来地として最適な環境を残していた。明治になると壊れた堤防が修築され、昭和 20 年代の頃には更にその外側に干拓堤防が築かれたことによって、その後は行政や住民の手厚い保護を受けて今や 1 万羽に達するツルが出水で見られるようになっている。

②植生

シイ・カシを主体とする常緑広葉樹林が潜在的な自然植生とする地域となっているが、現在は、市内の山地部の植生の多くは、スギ・ヒノキの人工林となっている。また、モウソウ竹林も広く分布し、早掘り筍の生産も行われている。

また、紫尾山麓一帯は、出水地域で発見され命名されたシダ植物が多くあり、県内有数のシダ植物の宝庫とされる。これは、八代海からの湿度の高い海風が市東部の山地に吹き付け、高度を上げ急に冷やされて紫尾山中腹に適度な空中湿度を与えているためといわれている。平野部は畑地、水田の雑草群落がほとんどである。

1-3. 都市的要素

(1) 市街化の動向

出水市の中心市街地は、本町地区や一般国道 447 号沿いに形成されている。他にも各駅周辺において進んでいるものの、いずれの地区も平均建ぺい率、容積率が高くなく(33%程度、48%程度)高度利用が図れているとはいいがたい。近年の市街化の状況を建築物の新築状況からみると、西出水駅周辺、米ノ津駅周辺で市街化が進んでいることがわかる。

市役所や鹿児島県出水合同庁舎、警察署、法務局出水出張所、出水税務署などの公共機関は中心市街地に集中している。また沖田工業団地や松尾工業団地等が隣接しているなど、産業の活気が感じられる。中心市街地から 500m も離れると、田園地帯や平屋建ての住宅地などが広がり、閑静な郊外住宅のおもむきに一変する。

また、高尾野駅周辺や野田郷駅周辺、県道出水高尾野線沿いや国道 504 号沿いには、商店や風情ある古い町並みの残る市街地が広がっており、それぞれの地域の中心的な役割を担っている。

(2) 都市計画など

①土地利用状況

山林が半数を超え(53.8%)でもっとも多く、次いで田畑(18.8%)、その他(21.2%)、宅地(4.9%)となっており、緑豊かな田園地帯を形成している(平成 18 年 11 月)。

②都市計画区域

市域面積 22,863ha のうち、旧出水市の一部である平野部を中心に 4,190ha(18.3%)が都市計画区域に指定されており、市人口の約 6 割が居住している。出水駅、米ノ津駅および西出水駅周辺の 439ha に用途地域が指定されている。

また、出水麓地区は、「重要伝統的建造物群保存地区」(平成 7 年 5 月 1 日選定、43.8ha)に選定されており、伝統的な石積みと生垣、武家屋敷等からなる古い町並みが保全されている。

③農業振興地域

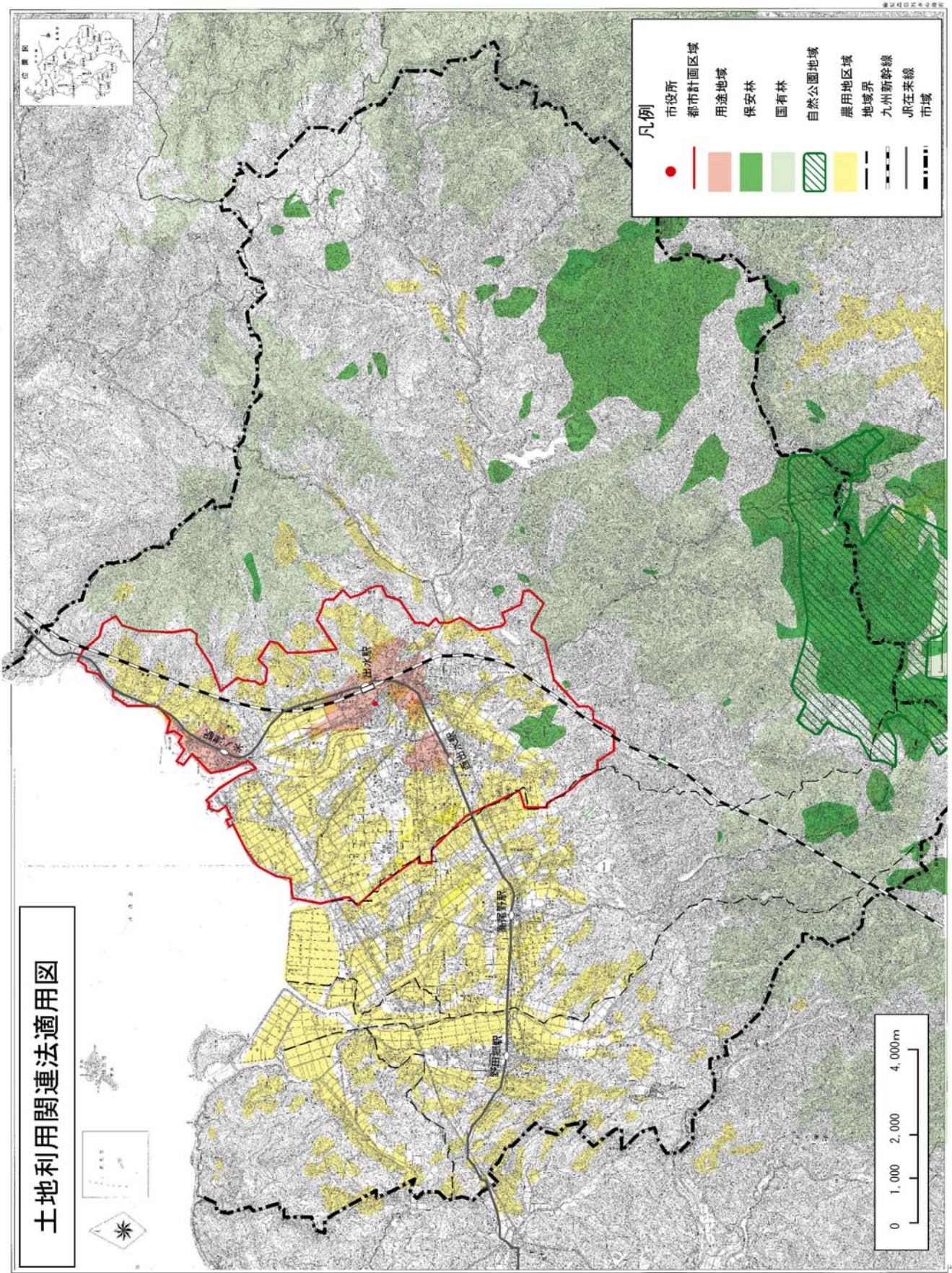
都市計画区域内を含め、扇状地の大部分は農用地区域に指定されている。

④保安林

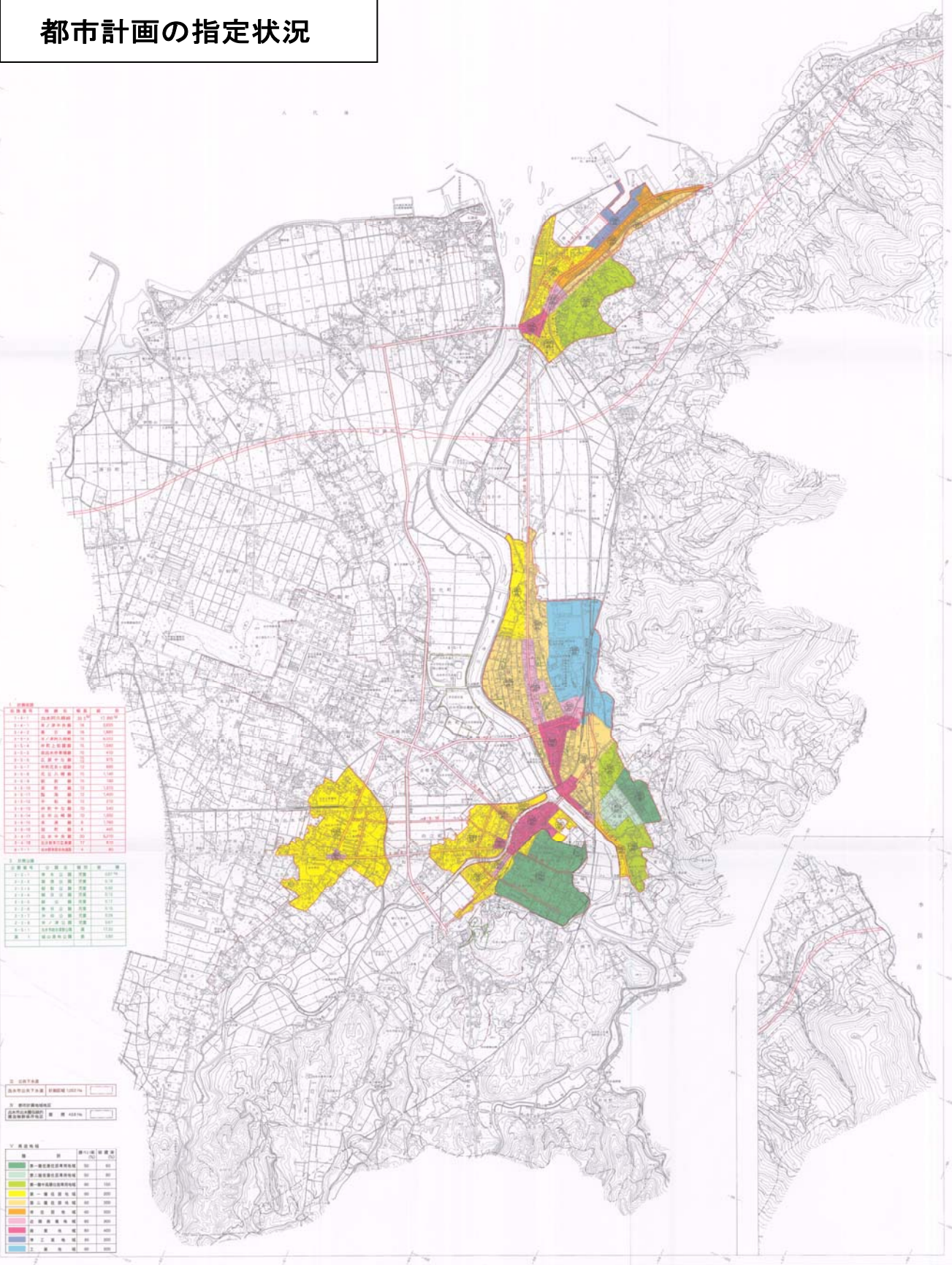
市南部の山地には広く保安林が指定されている。

⑤自然公園

矢筈岳、紫尾山一帯は川内川流域県立自然公園に指定され、貴重な動植物の宝庫になるとともに、登山道が整備されるなど自然観察や森林浴などを楽しむ場所として市民に利用されている。



都市計画の指定状況



1-4. 歴史的要素

(1) 出水の歴史背景

①古代

市東部の上場地区には、県内初の旧石器時代遺跡「上場遺跡」があり、まだ出水平野が海の底であった洪積世の時代より、台地の上では人々の生活が営まれていたことが分かる。

縄文、弥生時代に入り現在の出水平野へと生活の拠点を広げていくことになる。

②先史～中世

急峻な地形条件と隼人（熊襲の流れ）の台頭によって、中央集権国家への組み込みは九州内でもかなり遅く、文献上で初めて出水の地名が記されたのは8世紀初頭といわれる。

大化の改新によって国郡制が実施されることになり、700年頃薩摩国が設置された。

続日本書紀によると「和泉郡（いずみごおり）」とするされる。

古代の和泉郡は辺境における未開地の墾田化によって分解し、荘園化していた。

「未曾有の広大なる荘園」といわれる島津の庄が発展してゆき、和泉もやがて、島津庄に吸収された。



③近世

1187年、島津家初代となる島津忠久が薩摩・大隈・日向三州の守護職となり、家臣の本田貞親に命じて、山門院の木牟礼に築城させ島津三州支配の基礎を作り、1194年には日本最古の禅寺であり、島津家菩提寺となる鎮国山感応禅寺を創建した。島津第10代の太守島津忠国の弟島津用久が薩州家を起こし、1453年亀ヶ城に居を構え、出水郡、高城郡一円を領有した。

1593年出水は一時豊臣秀吉の直轄地となった。

江戸に入ると、外城の整備が進み、薩摩藩中で最も大規模な外城として整備され、出水地方の政治・文化・経済の中心として栄える。麓武家屋敷群は当時の行政の中核部として整備された場所。藩内他地域よりやや遅れたものの1690年頃から藩の新田開発により干拓がすすめられた。

生産力を上げるため、1704年頃から五万石溝が着工され、20kmにもおよぶ用水路が造られた。

④近現代

廃藩置県により、出水は鹿児島県に属することとなる。明治20年出水郡役所が麓に設けられ、明治22年には市町村制の施行により、上出水村、中出水村、下出水村、野田村、高尾野村となる。

昭和2年に鹿児島本線の全線開通。県営として、戦後には食料増産計画に基づいて、国営の大規模な干拓が行われた（昭和22年の荒崎干拓事業）。穀倉地帯となり、タバコ、苗木の畑作農業生産とあわせて、先駆的農業地域をつくりあげた。

軍国体制下、昭和15年に出水飛行場が完成。出水海軍航空隊が駐屯。戦時中は昭和20年に飛行場、工場が空襲を受けている。

昭和29年出水・米ノ津両町が合併し出水市が誕生し、昭和34年には高尾野町と江内村の合併により新しく高尾野町が誕生するとともに、野田村は野田町となる。

(2) 歴史的特色

①薩州島津家の歴史

1425年奥州島津家の流れをくむ島津用久が出水の地に薩州家を興して出水亀ヶ城に居城、以後七代忠辰に至る140年間、出水地方を支配することになった。薩州家五代実久の時代は薩州家の勢力が強大で、宗家島津氏を凌いでいたが、その後、分家伊作家から宗家を継いだ島津貴久が父忠良と共に薩州家を屈服させて三州を統一した。

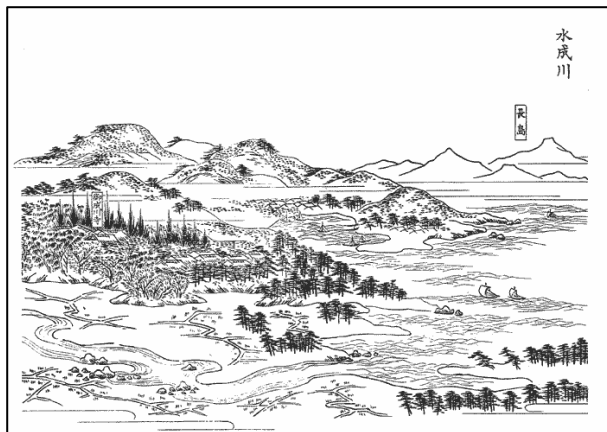
天正15年(1587年)になると、豊臣秀吉の征西により島津氏の北上は拒まれた。その時の出水城主は薩州家七代忠辰であり、島津義久の指揮下において八代地方を守っていたが、単独和平に応じて秀吉から本領安堵を許可された。しかし、まもなく起こった朝鮮の役では、忠辰の不首尾によって薩州家は改易され、出水地方は一時秀吉の直轄地とされたとされる。

文禄2年(1593年)、朝鮮の役における島津義弘・家久父子の軍功によって秀吉の死後、慶長4(1599)年正月には再び出水の地は論功行賞として島津氏に加増された。

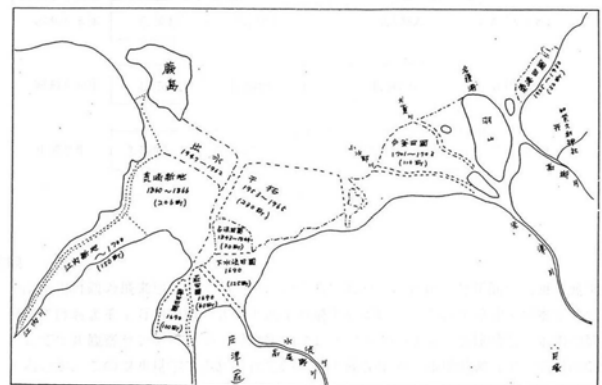
江戸時代に入ると、出水は薩摩藩最重要の境目となった。藩は他に先立って出水外城の建設を始めた。島津氏は膨大な武士人口を城下のみに収めることができず、地方へも居住させたのが外城制度の一つの由来であり、他も出水にならって造られた。出水は藩内最大の外城であり、藩内各地から選りすぐった高禄勇猛な武士を居住させたといわれている。元和6(1620)年の軍役高帳によると、出水には蒲生、国分、帖佐、加世田、日向等から多くの武士が来たといわれている。

②干拓の歴史とツルの保護

江戸時代、藩の財政確保のため各地で干拓事業が進められた。遠浅な有明湾に面した出水では大規模な干拓事業により次第に農耕地が拡張されてきた。この干拓事業は最終的に昭和の終戦後まで続けられ、現在のような広大な土地が出来上がった。越冬しに来たツルにとって昔から居心地のいい土地であったが、江戸時代の捕獲禁止令が解けた明治に入ってから、乱獲が始まった。一時は一羽もいなくなった年もあった。戦後も食料として狩猟され、日本に渡ってくるツルにとっては人間社会の影響を受けた受難の時代が続いた。1962年、出水市にツルの保護会が結成され本格的な保護運動が始まる。その後安心して夜を明かせる寝ぐらも設置され年々渡来してくるツルの数が増えてきた。現在では市民総出の保護運動は定着し、中学生による羽数調査なども行われている。



三国名勝図絵(出水市付近)



干拓の変遷図

(3) 史跡・文化財など

江戸時代初期に薩摩藩士の住宅兼陣地として「外城」が形成されるなど、肥後と薩摩の国境のまちとして栄えた歴史があり、これを背景とした歴史・文化的な街なみが多く残されている。

国指定文化財としては、特別天然記念物「鹿児島県のツル及びその渡来地」があげられる。また、麓町を中心とした住宅地一帯は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

県指定文化財としては、無形民俗文化財の種子島楽、兵六踊り、野田町熊野神社の田の神舞、野田町の山田楽がある。

市指定文化財としては、野間の関跡及び古井戸（史跡）、ヒノタニシダ（天然記念物）、上場遺跡（埋蔵文化財）など60件が指定されている。

指定文化財 一覧

国指定(特別天然記念物)	
鹿児島県のツルおよびその渡来地	
県指定文化財(有形民俗文化財)	
A	十一面千手観音像・脇立四天王像
B	絹本着色雲山和尚像

国選定(重要伝統的建造物群保存地区)	
出水麓伝統的建造物群保存地区	
県指定文化財(無形民俗文化財)	
C	種子島楽
D	兵六踊り
E	野田町熊野神社の田の神舞
F	野田町の山田楽

市指定文化財					
1	野間の関跡及び古井戸	(史跡)	2	薩州島津家の墓	(史跡)
3	山田正蔵の墓	(史跡)	4	五万石溝底水道	(史跡)
5	城山(亀ヶ城・花見ヶ城)	(史跡)	6	上場遺跡	(埋文)
7	出水市麓武家屋敷	(史跡)	8	山伏石像	(史跡)
9	宇土殿墓	(史跡)	10	五輪塔・層塔	(史跡)
11	五輪塔	(史跡)	12	逆修碑	(史跡)
13	山田昌巖灰塚	(史跡)	14	軍役高帳	(書画)
15	三十六歌仙	(書画)	16	児請絵巻	(書画)
17-1	出水假屋門	(有形)	17-2	税所邸他	(有形)
17-3	旧竹添邸他	(有形)	17-4	伊藤邸他	(有形)
17-5	伊牟田邸他	(有形)	18	出水の大楠	(天然)
19	ヒノタニシダ	(天然)	20	日置流腰矢指矢	(無形)
21	紅葉城跡	(指定)	22	木牟礼城跡	(指定)
23	磨崖仏	(指定)	24	五輪宝塔	(指定)
25	六地藏塔	(指定)	26	砂原の庚申碑	(指定)
27	麓の田の神像	(指定)	28	仁礼家(夫妻)の墓石	(指定)
29	浦の田の神像	(有形民俗)	30	八久保頭首工水神碑	(指定)
31	榎園鎮守社	(指定)	32	馬頭観音像	(有形民俗)
33	山神橋	(指定)	34	海の王子イタリア・ヴェニス	(有形)
35	西水流木造毘沙門天立像	(有形)	36	餅井奴	(無形民俗)
37	感応寺五廟社	(指定)	38	俊寛僧都碑	(指定)
39	感応寺仁王像	(指定)	40	大日集落の仁王像	(指定)
41	別府の田之神	(指定)	42	田多園の田之神	(指定)
43	中郡の田之神	(指定)	44	大日の田之神	(指定)
45	青木の田之神	(指定)	46	下特手の田之神	(指定)
47	屋地の田之神	(指定)	48	久木野の田之神	(指定)
49	餅井の田之神	(指定)	50	天神の田之神	(指定)
51	菅原神社の庚申碑	(指定)	52	旧小松神社の庚申碑	(指定)
53	下特手の道標	(指定)	54	八幡の庚申碑	(指定)
55	大日の庚申碑	(指定)	56	天神の石敢当	(指定)
57-1	武家屋敷門(吉満邸)	(指定)	57-2	武家屋敷門(浜田邸)	(指定)
57-3	武家屋敷門(吉満邸)	(指定)	57-4	武家屋敷門(吉富邸)	(指定)
57-5	武家屋敷門(石澤邸)	(指定)	58	川平の巨石群	(指定)
59-1	七田家のソテツ	(指定)	59-2	橋元家のソテツ	(指定)
59-3	感応寺のソテツ	(指定)	60	亀井山城について(通説)	(指定)

▼城山(亀ヶ城・花見ヶ城)



▼出水の大楠



▼紅葉城跡(高尾野城跡)



▼七田家のソテツ

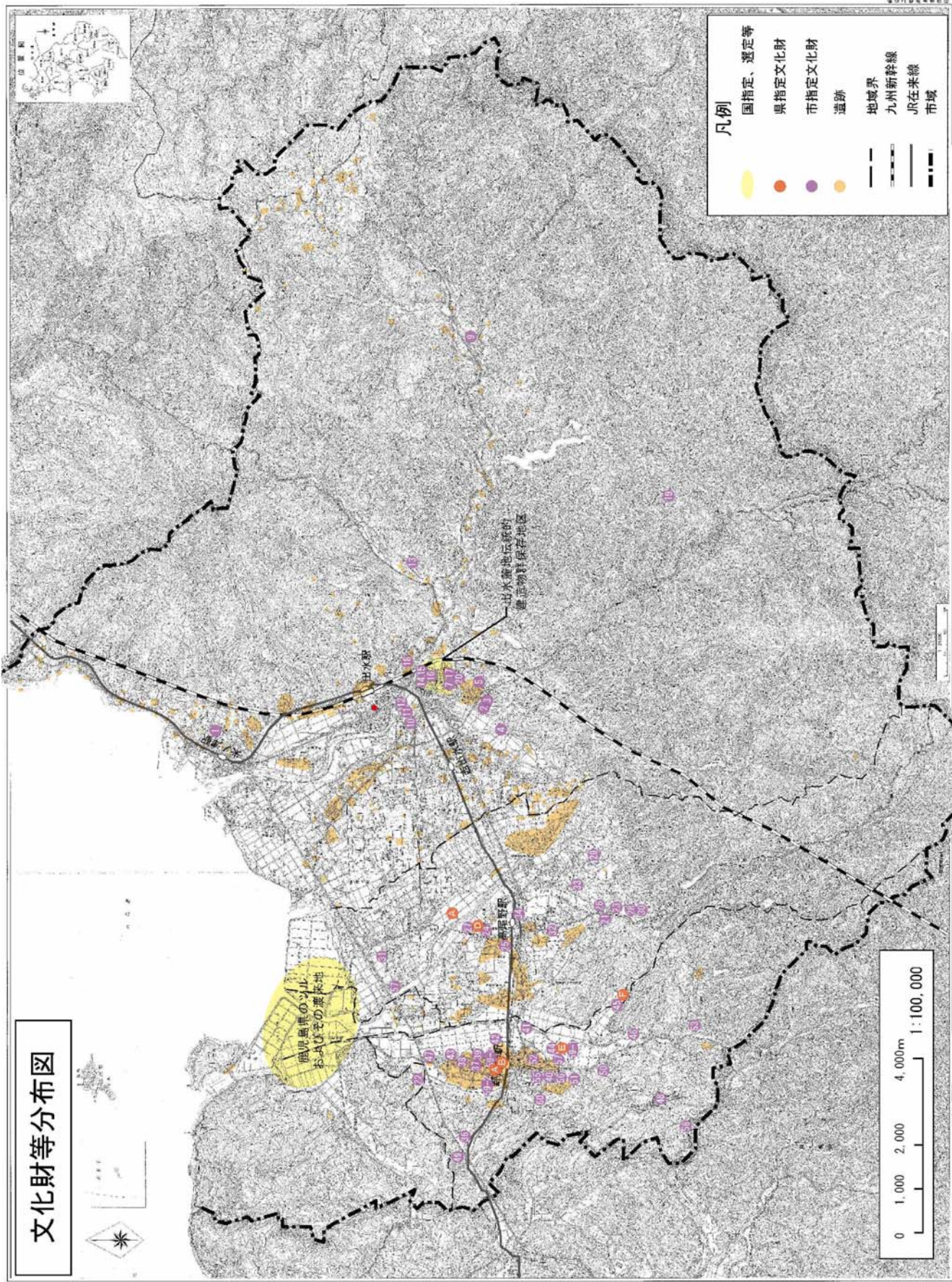


▼野田郷 武家屋敷門(吉満邸)



▼山神橋





出水市略年表

先土器時代：今から約1万5千年前のこの時代から出水地方での人類の生活がはじまった。
縄文時代：狩猟、採集による生活が出水地方でも多く確認されている。
弥生時代：農耕、稲作農業による生活がはじまる。
700年初頭：このころ薩摩国府が置かれる。薩摩正税帳、続日本記に「出水郡」という地名が確認される。
1156年：亀井山城が築かれる。
1179年：和泉兼保が亀ヶ城を築く。
1187年：島津忠久が、薩、隈、日三州の守護職となる。
1193年：本田親恒が、木牟礼城を築く。
1194年：鎮国山感应禅寺が創建される。
1425年：島津用久が薩州島津家（現在の出水）をおこす。
1587年：天下を望む豊臣秀吉が島津家を攻めるため出水に入る。
1599年：本田正親が初代の出水地頭に任命され、出水郷が発足。
1600年頃：薩摩と肥後（現在の熊本県地方）の国境に野間之関所が設けられる。
1644年：山田昌巖が出水街道に松並木を植えさせる。
1658年：野田、出水外城より独立し野田郷となる。
1734年：五万石溝が完成。
1872年（明治5年）：郡制が施行され、出水郡が発足。
1879年（明治12年）：出水郡役所が設置。
1889年（明治22年）：市町村制が施行。上出水村、中出水村、下出水村、野田村、高尾野村となる。
1890年（明治23年）：現国道3号が開通。
1891年（明治24年）：上出水村から大川内村が分かれる。
1909年（明治42年）：山神橋が地区民により石橋として架橋。
1914年（大正3年）：下出水村を三笠村と改称。
1919年（大正8年）：電灯が灯る。
1920年（大正9年）：県立出水中学校（現在の出水高校）が開校。
1927年（昭和2年）：鹿児島本線全線が開通。
1940年（昭和15年）：出水飛行場が完成。
1945年（昭和20年）：荒崎国営干拓工事が着工。
1952年（昭和27年）：出水のツルが国定特別天然記念物として指定される。下山海岸防潮堤工事。
1954年（昭和29年）：出水町と米ノ津町が合併して出水市が誕生。大川内村が出水市に編入。
1958年（昭和33年）：西工区の干拓工事が完成して蕨島が陸続きになる。
1959年（昭和34年）：高尾野町と江内村が合併し、新「高尾野町」が誕生。
1960年（昭和35年）：現国道328号が開通。出水商業高校野球部が県大会に優勝し、甲子園大会に出場。
1961年（昭和36年）：高尾野町商店街県道拡張舗装工事開始。
1965年（昭和40年）：出水干拓が完成。
1966年（昭和41年）：高尾野ダムが完成。翌年、ダム周囲に桜230本、もみじ230本植樹。
1969年（昭和44年）：仲町商店街にアーケードが完成。
1970年（昭和45年）：主要地方道鹿児島水俣線が国道（328号）になる。
1972年（昭和47年）：新しい米ノ津橋が開通。栄町商店街にアーケードが完成。
1973年（昭和48年）：東光山にテレビ中継所が完成。高川ダムが完成。
1975年（昭和50年）：野田村は野田町となる。
1977年（昭和52年）：国営出水平野水利事業が完成。
1981年（昭和56年）：海洋公園と海水浴場がオープン。
1987年（昭和62年）：第1回ツルマラソン大会。東光山に展望台が完成。
1989年（平成1年）：荒崎にツル観察センターが開設。高野山レクリエーション公園完成。
1991年（平成3年）：東光山公園にレインボーブリッジが完成。弓道場と総合武道館が落成。
1992年（平成4年）：出水市音楽ホールが完成。
1995年（平成7年）：クレインパークいずみ（ツル博物館）が開館。温泉センターもみじ完成。
1999年（平成11年）：広域農道（北薩オレンジロード）全線開通。
2004年（平成16年）：九州新幹線が新八代～鹿児島中央間で部分開業。

1-5. 市民生活に関する要素

(1) 出水市民の気質～出水兵児（いずみへこ）～

出水地方で男児に対して男らしい気構えを説くときなどに、現在でも聞かれる言葉。寛永6年（1629年）出水郷に第三代地頭としてやってきた山田昌巖は、立派な武人として多くの士民に慕われていた。その昌巖の教えに基づき、江戸時代後期に熊本細川藩の学者伊沢蟠龍の著作から改作された掟が「出水兵児修養の掟」で、郷中教育の中において、青少年に対する厳しい訓練・訓育に用いられていたという。「掟」では、武士としての道義や覚悟を教える中で特に重要なこととして、出水兵児は武勇に長けるだけではなく学問・教養、さらに相手に対して情をもってあたるべきと教えている。

『出水兵児修養掟（全文）』

士は節義を嗜み申すべく候。節義の嗜みと申すものは、口に偽りを言はず、身に私を構へず、心直（すなお）にして作法乱れず、礼儀正しくして上に諂（へつ）らはず、下を侮（あな）どらず、人の患難を見捨てず、己が約諾を違へず、甲斐かいしく頼母しく、苟且（かりそめ）にも下様の賤しき物語り悪口など話（ことば）の端にも出さず、譬（たと）い恥を知りて首刎ねらるゝとも、己が為すまじき事をせず、死すべき場を一足も引かず、其心鐵石の如く、又温和慈愛にして、物の哀れを知り人に情あるを以て節義の嗜みと申すもの也。

(2) 市内学校校歌からみた地域の資源

校歌に歌われる地域の資源は、地域の人々がシンボルとして大事にしていきたいという思いがこめられていると考えることができる。そこで、市内の小、中、高等、養護学校の校歌の歌詞を整理し、景観資源に関連する言葉を整理した。

整理の結果から、骨格を形成している地形条件からくる自然資源（山並み、海や島々、川など）が圧倒的に多く、さらに地域のシンボルとして親しまれている資源（ツル、歴史、社叢林や寺社、古樹・巨木など）や季節を感じさせる資源（アユ、山茶花、ざぼんなど）、生業と深く関わりのある資源（農業、漁業）などが多くみられる。

校歌からみる地域の資源

分類	校歌内の表現	景観資源	分類	分類	校歌内の表現	景観資源	分類
自然(地形)	紫尾の山[5][38][48] 紫尾の峯[36][50] 久遠の緑[53] 紫尾の高嶺[63] 紫尾山[70] 紫尾が峰[78] 緑の紫尾[83]	紫尾山系の山並み(出水市の南部を東西に広がる紫尾山系)	山並み	自然環境(生物)	つるのむれ[18] 千羽鶴舞う[19] 鶴[25][29][40][68][81] たずがね[35] まなづる[49] 田鶴[55][60][75] 春鳳[76]	冬に飛来する鶴、鶴の音	生物
	矢筈の峰[9][26][80] 矢筈岳[10] 矢筈ね[14] 矢筈[19][72] 矢筈山[54] 矢筈の山[59]	矢筈山と山並み(出水市の東部を北東に広がる肥薩山脈とその主峰・矢筈山)			若鮎[7][12]	鮎(米ノ津川)	
	朝日嶽[31] 雁股山[32] 朝日岳[34] 朝日嶺[61]	熊本県境界の山並み			荒崎[20] 稲穂ゆたかな干拓地[28] 広き荒崎[69] ざぼん黄色く実る[24]	広大な干拓地 農作物(農業)	生業
	しらぬひ[13] 不知火の海[15][27][77] しらぬ火の海[23] 不知火海[37] 不知火の[41][52] 青い海[42] しらぬ火海[65] 不知火の潮の香り[67] 青き海[71]	八代海(不知火海)	白ほぶね[43]		ケタ打瀬漁	生業(文化的景観)	
	島影揺らぶ不知火海[56] 島々遥か[74]	八代海と島々	城山松[1] 野間の関[16] 島津のびよう[46] 八幡様の森[3] 天満宮のやしろ[57] 千年の松[58] 大楠二本[21]		亀ヶ城(出水麓地区) 鎮国山感応寺の五廟社 箱崎八幡宮 生松天満宮 生松天満宮境内の松 切通小校庭の大楠	島津の歴史 地域の文化 地域のシンボル	
	高原[33]	上場高原	日常風景		山茶花かおる高原[64]	山茶花	生活景
	あたごの山[6] 三笠の山[45] 笠山の緑[66]	愛宕山 笠山					
	出水野[2][17] 出水平野[22] 大野原[39]	出水平野の広がり					
	広瀬の川[4] 広瀬川原[8] 米ノ津川[11] 出水川[30] 広瀬の流れ[51] 広瀬川[62][73] 広瀬[79][82]	米ノ津川(広瀬川)					

小学校の校歌

地域	学校名	校歌	景観資源
出水	出水小学校	・城山松[1]の 千代かけて 偉人の生氣 こんこんと わくや出水の かげ清き 自然に我ぞ 恵まるる	城山松[1] →出水麓の城山
	西出水小学校	・豊かににおう出水野[2]の 八幡様の森[3]ちかく いらか輝く学び舎に 明るい自主の鐘がなる ・広瀬の川[4]の水清く 生きぬくかうけついで みんななかよくほがらかに 心からだみがきあう ・青雲たかくみんなに 朝夕仰ぐ紫尾の山[5] のぞみ大きくはばたいて 平和の朝日の夢をよぶ	出水野[2] →出水平野 八幡様の森[3] →箱崎八幡宮 広瀬の川[4] 紫尾の山[5]
	東出水小学校	・朝かぜふきて花かおる あたごの山[6]に松が枝の たかなる日にもひたすらに ・若鮎[7]おどるせをはやみ 白日受けてよどみなき 広瀬川原[8]のなでこの ・北にそびえるふるさとの 矢筈の峰[9]をあおぎつつ 親のめぐみを身に受けて	あたごの山[6] →愛宕山 若鮎[7] 広瀬川原[8] 矢筈の峰[9]
	米ノ津小学校	・矢筈岳[10]から吹いてくる 希望の朝のそよ風よ 明るい瞳はればれと 勇んでかよう足音が ・米ノ津川[11]のさざなみに はつらつはねる若鮎[12]よ 仲良くこの手組ながら 心をみがき身を鍛え ・潮の香清いしらぬひ[13]に 広がる夢よあこがれよ 輝く歴史うけついで ふるさとの朝日担いたつ	矢筈岳[10] 米ノ津川[11] 若鮎[12] しらぬひ[13]
	米ノ津東小学校	・矢筈ね[14]清く明けそめて 不知火の海[15]かがやけば 緑のおかにきょうもまた ・名に負う野間の関[16]ちかく とどろとよせる潮の音に 不屈のいのち受けついで ・出水野[17]はるか青雲に さやかにかける つるのむれ[18] つばさも強くはばたいて	矢筈ね[14] →矢筈の峰 不知火の海[15] 野間の関[16] 出水野[17] つるのむれ[18]
	切通小学校	・東には矢筈[19]を望み 南には千羽鶴舞う[19] 荒崎[20]のそらみおろし 庭に立つ大楠二本[21]	矢筈[19] 千羽鶴舞う[19] 荒崎[20] →干拓地 大楠二本[21] →校庭内のシンボル
	荘小学校	・出水平野[22]のうすみどり 青い小鳥がすみそな 伸びる世界に胸はって ・雲の峰湧くしらぬ火の 海[23]の青さよ 潮騒よ あすの光を感じつつ ・ざぼん黄色く実る[24]ころ 鶴[25]も来て舞う学園に 真理をもって手をつなぎ	出水平野[22] しらぬ火の海[23] ざぼん黄色く実る[24] →生業の景 鶴[25]
	蕨島小学校	・矢筈の峰[26]に光映え 不知火の海[27]波しずか 歴史も古き学舎に ・稲穂ゆたかな干拓地[28] 青空高く舞う鶴[29]の 雄々しき姿そのままに	矢筈の峰[26] 不知火の海[27] 稲穂ゆたかな 干拓地[28] 鶴[29]
	大川内小学校	・出水川[30] 溯瀬となりて わが里を 走り流るる その川は 大きなれど 志は 千里のかなた 末ついに 大海に入る ・ひむがしは 朝日嶽[31]より 西の方 雁股山[32]と そそり立つ その青山の かけけたる 理想は高し 天上の 星と語ろう	出水川[30] 朝日嶽[31] 雁股山[32] →熊本県境の山並み
上場小学校	・朝雲匂ふ高原[33]に 古きゆかりの土踏んで 仰ぐ矢筈の嶺はるか ・開拓の意思受けついで 強く生きよと朝日岳[34] ちかいを胸にたくましく	高原[33] →上場高原 朝日岳[34]	
高尾野	高尾野小学校	・たづがね[35]さゆる北薩に 高くそびゆる紫尾の峯[36] 仰ぐ瞳ははつらつと もゆる若葉に風薫り 不知火海[37]に波映えて 明るい希望にみち溢れ	たづがね[35] →鶴の音 紫尾の峯[36] 不知火海[37]
	下水流小学校	・仰げば紫尾の山[38]高く 一望はるか大野原[39] 鶴[40]は朝日に映えてとぶ ・波うるわしき不知火の[41] 洋々として静かなる 広き心をそのままに	紫尾の山[38] 大野原[39] →出水平野 鶴[40] 不知火の[41]
	江内小学校	・朝日はのぼる青い海[42]に ぼっかり浮かんだ 白ほぶね[43] ・南のはてにまなづる[44]あそび おやはぐみに めぐまれて ・北にそびえる三笠の山[45]に けさも小鳥の うたほがら	青い海[42] →八代海 白ほぶね[43] →ケタ打瀬船 三笠の山[45] →笠山
野田	野田小学校	・島津のびよう[46]よ 石垣[47]よ 歴史はとわに かがやいて 仲よしこよし 元気よく 磨くこのたま このからだ ・はるかに仰ぐ 紫尾の山[48] まなづる[49]高く はばたいて 仲よしこよし ほがらかに そだつこのゆめ このぞみ	島津のびよう[46] →鎮国山感応寺の 五廟社 紫尾の山[48] まなづる[49]

中学校の校歌

地域	学校名	校歌	景観資源
出水	出水中学校	<ul style="list-style-type: none"> あけぼのの光の渦に 紫尾の峯[50] そびゆるところ希望わく 学びの窓にひるがえる 自治の大旗 われらいざともに仰がん 清らなる広瀬の流れ[51] とこしえに 水は美わし一すじに 真理たずねてうち建つる 崇き校風 われらいざともに讃えん 	紫尾の峯[50] 広瀬の流れ[51]
	米ノ津中学校	<ul style="list-style-type: none"> 千古の響きとうとうと 胸を揺するか不知火の[52] 岸辺に立てばあけぼのの 果てに世界の友は呼ぶ 久遠の緑[53] 天そそる 矢筈山[54]下に花と咲き 高き文化の夢抱く 若きわれらの血は燃ゆる 田鶴[55]舞う里の 学び舎に 聖なる命 競いつつ 愛と自由の鐘打ちて 平和の光 もたらさん 	不知火の[52] 久遠の緑[53] →紫尾山系の山並み 矢筈山[54] 田鶴[55]
	荘中学校	<ul style="list-style-type: none"> 島影揺らぶ不知火海[56]の 遠潮鳴りを数えつつ 愛の心を育みて 真理の鐘をうち鳴らす さみどり深き杜かげに 天満宮のやしろ[57]あり 朝な夕なに慕いては 千年の松[58]をふり仰ぐ 矢筈の山[59]の空遠く 紅染めてたなびけば ささやくがごとくオリオンズ あしたの夢を描きたて 鳴き翔く田鶴[60]の数みせて こだまさやけき学び舎に ともに手をとり肩をくむ 師の君在す友居ます 	島影揺らぶ 不知火海[56] →八代海と島々 天満宮のやしろ[57] →生松天満宮 千年の松[58] →境内のご神木 矢筈の山[59] 田鶴[60]
	大川内中学校	<ul style="list-style-type: none"> 緑滴る朝日嶺[61]の 流れも清き広瀬川[62] 河辺に映ゆる学び舎に 自由の鐘は鳴りひびく 	朝日嶺[61] 広瀬川[62]
高尾野	高尾野中学校	<ul style="list-style-type: none"> 紫尾の高嶺[63]を仰ぎつつ 川音さやけき里に生い 身も健やけくほがらかに 山茶花かおる高原[64]の 果てにしらぬ火海[65]近く 北斗は結ぶ友垣や 世界の平和さずくべき 	紫尾の高嶺[63] 山茶花かおる高原[64] →生業の景 しらぬ火海[65]
	江内中学校	<ul style="list-style-type: none"> 笠山の緑[66]に映えて この里にみなぎる陽光 腕を上げ大気を吸いて ふり仰ぐ空の青さよ 不知火の潮の香り[67]を 漂わす窓のそよ風 純白のノートをたどる ひとすじのベン光よ シベリアの夢を運びて 鶴[68]の来る広き荒崎[69] 肩寄せて友と語らう 開拓の古き歴史よ 	笠山の緑[66] 不知火の潮の香り[67] 鶴[68] 広き荒崎[69] →広大な干拓地
野田	野田中学校	<ul style="list-style-type: none"> 空高く そびゆるものよ 金色の 朝の紫尾山[70] われらまた 理想大きく 胸はりて いざ はばたかん 世界にも 続けるものよ 有明の かの青き海[71] われらまた 世界の子らと 互していく いざ 学ばなん 	紫尾山[70] 青き海[71]

高校の校歌

地域	学校名	校歌	景観資源
出水	出水商業高校	<ul style="list-style-type: none"> 希望に燃ゆる朝まだき そびゆる矢筈[72]厳然と 千古の歴史を宿しつつ 永久に変わらぬその姿 春はみどりの影うつし 流れも清き広瀬川[73] 集う若人ひたすらに たがやす真理いや通し 暮るる夕べの西空に 燃ゆる島々遥か[74]なり 田鶴[75]啼き渡るこの里に 愛と自由の鐘は鳴る 想えば試練の幾年か みなぎる若さ天を衝く 	矢筈[72] 広瀬川[73] 島々遥か[74] →八代海と島々 田鶴[75]
	出水高校	<ul style="list-style-type: none"> 春鳳[76]の天がけり 島山高く水青き 不知火の海[77] 打ち越えて 万里はてなき海原に 浮かびてつひに隠れなば 若き心を誰か知る 山の彼方に幸ありと 希望の星の降りしより 夏の暁紫尾が峰[78]に いさよう雲を恋ひくれば 大いなるかな天地は 遙かなるかなわが道は かのパイカルの上高き 天門破り吹く風に 老松が枝の鳴る日には ひねもす旅を想へども 広瀬[79]さやかに照る月の 淀まぬ水に澄む心 四方に周れる青山の 北の鎮めと秀でたる 矢筈の峰[80]に初雪の 降れるあしたも鶴[81]が音の わたる夕べも止まらず 若やる胸の高鳴りは 	春鳳[76] →鶴 不知火の海[77] 紫尾が峰[78] 広瀬[79] 矢筈の峰[80] 鶴[81]
	出水工業高校	(未調査)	—
	出水中央高校	(未調査)	—
野田	野田女子高校	(未調査)	—

養護学校の校歌

地域	学校名	校歌	景観資源
出水	出水養護学校	<ul style="list-style-type: none"> 広瀬[82]の白い光浴び 朝日のようにかがやく笑顔 緑の紫尾[83]の薫り立ち 希望あふれる明るい校舎 	広瀬[82] 緑の紫尾[83]

(3) 市民に親しまれている四季の風景～出水市市勢要覧より～

①ツルの飛来地（冬）



②東光山公園の桜（春）



③米ノ津川（夏）



④出水麓集落（秋）



出水市内の主な年中行事

1月：成人式、消防出初め式
2月：ツルマラソン大会
3月：加紫久利神社春祭、ツルを送る祭り、中の市、箱崎八幡宮春祭、桜まつり
4月：アサリ貝（潮干狩）解禁
5月：市民グラウンドゴルフ大会、市長杯争奪高校野球大会
6月：アユ解禁
7月：海洋公園プール海開き、ふるさと出水クリーン作戦、自治公民館対抗野球大会、市民体育大会、上場高原コスモス園コスモス植え、夏祭りいざみ
8月：高尾野夏祭り、野田郷夏祭り、米ノ津川精霊流し、24時間高尾野ひまわり駅伝大会
9月：紫尾神社秋まつり
10月：上場高原コスモス園古代マーケット・オープン、ケタ打瀬網解禁、ツル第一陣飛来、植木市
11月：ツル観察センターオープン、出水麓まつり、オールドカーフェスティバル、市総合文化祭、大産業祭、たかおの鶴駅伝大会
12月：歳の市、市内一周駅伝競走大会、あったか歳末特産品まつり

2. 出水市の景観資源

(1) 景観資源の分類

景観資源は、その「性質」と「形態」から分類することができる。本調査においては、以下の5つの項目で分類し、景観資源を整理した。

①自然・風土に関する資源

山、山なみ、段丘などの地形や河川、独立樹など、まちの成り立ちの基本的な骨格を形づくる自然条件であり、出水らしさを創り出す基盤となっているもの

- ・山・山並みの景観
- ・海の景観
- ・ツルに関する景観
- ・河川の景観 など

②生業や生活文化に関する資源

市民の生活や生業、風土により形成されてきた文化的景観地や景観資源となっているもの

- ・田園の景観
- ・植木の景観
- ・里山・里地の景観
- ・漁業の景観 など

③歴史に関する資源

城下町や歴史的建造物、社寺などの長い間に醸成されてきた出水固有の文化を伝えるもの

- ・史跡、石碑の景観
- ・街並みの景観
- ・寺社の景観 など

④都市・社会基盤に関する資源

道路や鉄道、公共施設や住宅地工業地などの都市的な生活を支える都市施設や土地利用など、出水市の風土や文化を残しながらも現在の暮らし方を反映するもの

- ・市街地の景観
- ・工業、商業地の景観
- ・道路・鉄道 など

⑤祭事・イベントに関する資源

市民間に伝わる民俗芸能等の文化的景観、祭りなどに見られる各地の特色を反映した民俗芸能、出水市の伝統として庶民の間で長く受け継がれているもの

- ・祭りの景観
- ・イベントの景観 など

(2) 景観資源

【1】 自然・風土に関する景観資源

A. 出水の骨格をになう景観資源

まちの骨格を形づくり地形や風土からなる大景観は、自分の住むまちの印象を支えているもので、学校の校歌にも多くみられるように、出水の景観の素地となっている。

① 市街地の背景となる山並み

市街地の背景に遠く見える山並みは、住民が意識する・しないに関わらず、市内の様々なところから、日常的に眺めている市民に親しまれた景観資源である。

出水市南部に広がる紫尾山系は標高 1067mの北薩地域で随一の紫尾山を中心とした山並みが広がり、東部には標高 687mで頂上部のとんがりが印象的な山の形である矢筈岳を主峰とする肥薩山脈からなる山並みが広がっている。

また、西部には、標高 394mの笠山が阿久根市との境界にそびえ、荒崎干拓からツルが飛来する景観の背景となっている。

■紫尾山系(米ノ津川からの眺め)



■紫尾山系(高尾野川からの眺め)



■矢筈岳と肥薩山脈(田園地帯からの眺め)



■矢筈岳と肥薩山脈(名護港からの眺め)



■笠山(荒崎干拓地からの眺め)



② 雄大な八代海

出水市の北部に広がる雄大な八代海は、漁業活動の場やレジャー活動の場として市民に親しまれている資源であり、出水市の景観の骨格を支える1つである。

八代海とその向こうに見える島々の姿や、切通の自然海岸は美しい景観として、市民に親しまれている。

■八代海と島々(名護港からの眺め)



■切通の自然海岸



■八代海と島々(福ノ江海岸からの眺め)



③ シンボル軸となる河川

南部の山地から出水平野を通り、八代海に注ぐ河川は、出水市のシンボル軸となる景観の骨格の1つであり、東側には米ノ津川、西側には野田川・高尾野川が流れている。

季節の風物詩としてアユや水鳥の姿を眺めることのできる場でもあり、市民のオアシスとなっている。

■米ノ津川(下流)



■米ノ津川(上流)



■高尾野川(中流)



■野田川(下流)



④ 広大な平野

校歌などでも歌われた出水平野の広がりある景観は、生産活動の場であるとともに、人々の生活の場であり、出水の景観の素地となっている。

■広がりある平野(東光山公園からの眺め)



■広がりある平野(荒崎展望公園からの眺め)



B. 豊かな自然環境

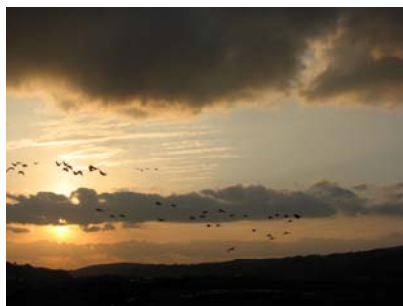
① 飛来するツル

毎年10月から翌年3月にかけて、遠くシベリア大陸から出水の干拓地へ渡来するツルの群は、秋から冬にかけての風物詩となっており、荒崎干拓地を中心に、飛来するツルの群の姿は市内のいたるところで目にする事ができる特色ある景観となっている。

■荒崎干拓地におけるツルの群



■夕景の中飛来するツル

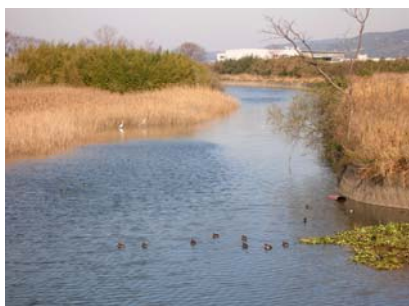


② 多様な生物環境

出水市の平野には、ツルだけでなく、かもやサギ等の様々な野鳥を水辺の近くで見ることができ、その数は100種以上といわれている。また、日本では出水だけでしか見られないオオズグロカモメも飛来するため、野鳥観察のメッカとなっている。

また、米ノ津川や高尾野川は、アユの生息する清流である。

■水辺の野鳥



■アユの生息する米ノ津川



③ 豊かな干潟

東西干拓沖には、小規模だが豊かな干潟が残っており、季節によって、市民が潮干狩りやマテ貝採りなどを楽しむ光景がみられる。

■干潟でのマテ貝採り(干拓沖)



④ 貴重な樹木（天然記念物等）

出水には、樹種としての貴重な樹木が残っている。

「出水の大楠」は、樹齢 1,300 年、樹高 12m、根まわり 17.5m もあり、市の天然記念物に指定されている。蒲生の大楠との間の悲しい恋の物語も伝えられているように、市民に長く親しまれている。また、県立自然公園の中には、樹齢 100～199 年（推定）の紫尾山のアカガシが貴重な樹種として、林野庁により「森の巨人百選」に選定されたものの、残念ながら台風により、倒れてしまった。

■出水の大楠



C. 水辺に親しめる環境

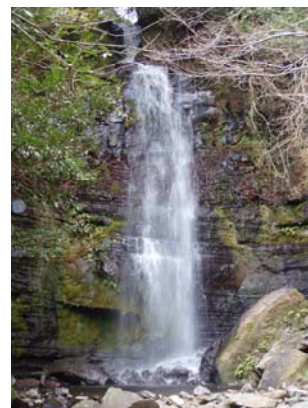
① 自然の親水環境・滝

南部に山間地を抱える出水市では、自然の親水地である滝の景観が見られる。緑豊かな山間部での散策の際のちょっとしたオアシスとなっている。

■轟の滝



■轟脇の滝



② 身近な親水空間・河川

出水市には、市民に身近な河川において、水辺に親しむことのできる親水空間が整備され、地域の人々に親しまれている。

■米ノ津川・親水護岸



■針原地区・砂防河川



■高尾野川・親水護岸



D. 地域のシンボルとなる自然資源

① 地域のシンボリックな緑（城山等）

市街地の背景となる山並みとは別に、地域の人々にとって、親しみある地域のシンボルとなる山がある。亀ヶ城山や亀井山城などは、歴史的な拠点であったことなどから、精神的なシンボルとしての身近な緑の景観資源となっている。

■亀ヶ城山跡



■東光山(市街地からの眺め)



② 歴史的な縁のある古樹

歴史のある集落が多く残る出水市には、古樹や巨木が多く残り、特に、歴史的な縁のある古樹が市民の手により、今も大切に保全されている。

野田地区の感応禅寺などでは、薩州島津家に縁のあるソテツ（推定樹齢 400 年前後）が残っているなど、歴史的・植物学的に価値を有する古樹として、市民に親しまれている。

■七田家のソテツ(市指定文化財)



■感応禅寺のソテツ(市指定文化財)



③ 地域のシンボリックな樹木（巨木、社叢林など）

樹木は長い時間をかけ、大切に育てられることにより、地域のシンボリックな印象を有する緑の景観となることがある。歴史的な街並みの残る麓地区の庭木や、古いまちの片隅に残る巨木、また地域に親しまれた寺社の森（社叢林）や、学校の校庭の巨木などは、地域の人々が日常的に目にし、愛着を感じられる身近な緑のシンボルとなっている。

■熊野神社の森(社叢林)



■古い屋敷の屋敷林(出水麓地区)



■古いまちの片隅に残る巨木



■道路沿いの巨木(県道 374 号沿い)



■学校の校庭の巨木(米ノ津中の楠)



■切通公園の古木



④ 防風林としての松並木

八代海に面していることから、台風など風による影響は大きく、福ノ江海岸を中心に、防風林として松林が整備されており、海辺のシンボリックな景観となっている。

■海岸沿いの松林(海から)



■海岸沿いの松林(福ノ江港)



【2】 生業や生活文化に関する景観資源

A. 活力ある生産活動の景観

① 広大な美しい農地

出水野に広がる農地は、干拓により、まとまった農地が広がり、農業活動とともに、四季折々に美しい景観をみせている。広大な農地には、田植えが終わり夏にかけて一面の緑の絨毯が広がり、実りの秋になると一転して黄金色に、収穫期には、今では少なくなった風情ある掛け干しの光景もみることができる。

■干拓地に広がる一面の田園の緑



■掛け干し



② みかんのなる丘陵地

出水市の東部を中心に、みかん畑を多くみることができる。丘陵地に植えられたみかんの木々に実がなる時期には、緑の斜面に黄色の実が光り、独特の美しい景観を形成している。

また、平地では、強風からみかんを守るために、みかん畑の回りに高い生垣が防風林として設置されており、生業と生活文化が密に関係した地域固有の景観が形成されている。

■丘陵地のみかん畑(針原地区)



■みかん畑をまもる防風林(米ノ津地区)



③ 植木の生産

高尾野地区を中心に、歴史的に植木・苗木業がさかんであり、いたるところに植木が育てられている景観をみることができる。美しい自然の景観の中に、活力ある産業活動が調和した地域固有の景観である。

■植木畑(出水地区)



■植木畑(高尾野地区)



④ 緑の映える茶畑

米ノ津川の上流や高尾野地区などでは、緑豊かな茶畑の景観をみることができる。

丁寧に手入れされたお茶の木が並ぶ秩序ある景観は、茶畑が持つ特有の美しさと、活力ある産業活動を感じさせる地域の資源である。

■茶畑(高尾野地区)



■山間に広がる茶畑(下大川内地区)



⑤ 棚田

山間の狭い土地を有効活用し、農地を確保するため、先人による努力と工夫により整備された棚田は、斜面と耕地、石積みなどからなる特有の幾何学な美しさを有しており、芭蕉地区や角石地区などで、今も見ることができる貴重な景観資源である。

■緑が生える棚田



■収穫期の棚田



■山間の棚田



■周囲と調和した棚田(高尾野地区)



⑥ 海苔の養殖

出水市が面する八代海からの恵みとして、海苔の養殖が盛んであり、海岸沿いにはノリヒビが設置された養殖の景観を見ることができる。

■八代海での海苔養殖



■八代海での海苔養殖



⑦ ケタ打瀬船・エビ漁

ケタ打瀬船によるエビ漁は、八代海でのエビを獲る伝統的な漁の様式で、300年の歴史を誇る歴史的な漁業景観である。風をはらんだ大きな帆をつけたケタ打瀬船が海に浮かぶ景観は、出水市の冬の風物詩となっている。

また、海岸近くでは、獲れたエビを干す光景もみられ、産業活動と密接に関わりのある地域固有の景観である。

■ケタ打瀬船



■エビ干しの光景



B. 活力づくりの取組による景観

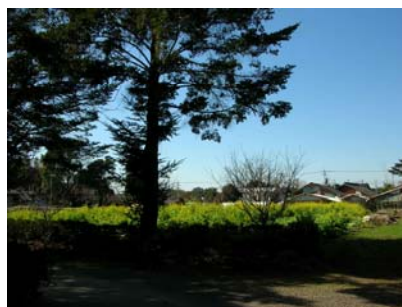
① 休耕田での景観作物

農業の担い手不足などから発生する休耕田や農閑期の農地を放置するのではなく、魅力ある地域づくりに活用する取組みとして、景観作物を栽培する取組みがみられ、近くを訪れる人や通りかかった人など、多くの人の目を楽しませている。

■休耕田でのハナショウブ(野田地区)



■菜の花畑(野田地区・感応寺隣)



② 担い手育成・体験農業

担い手不足や農業での活力づくりにつなげる市民レベルの活動として、まちの駅として、農家による体験農業の取組が行われている。

■体験農業(田植え)



■体験農業(収穫)



C. 生業等と結びついた地域文化の景観

① 田の神様

田の神様は「タノカンサア」と呼ばれる田んぼの守り神として、薩摩藩独特の神様である。田んぼの良く見えるところに建てられ、米の豊作を守るとして市民に愛され、親しまれている地域固有の文化的な景観であり、田の神様と田園からなる景観は、どこか人々をほっとさせる景観となっている。

■田の神様



■田園景観と田の神様



② 昔ながらの生活文化

昔はどこにでも見られた生活文化を感じさせる景観は、今ではほとんど見るものがなくなってしまった貴重な生活文化の景観である。そのような生活に密接した景観は、人々に懐かしいふるさとの原風景を感じさせる景観でもある。

■味噌なめての碑



【3】 歴史に関する景観資源

A. 歴史的なまちなみ

① 出水麓地区（重要伝統的建造物群保存地区）

周囲より少し高い台地の上に位置し、碁盤の目のように整然と区切られた道路、玉石と生垣からなる武家屋敷群、風格のある門や巨木からなる出水麓地区のまちなみは、薩摩と肥後の国境に位置し、屈強な武士団が暮らしてきたまちの趣を今に伝える貴重な景観である。

今も当時の趣を残しながらも、多くの人が昔と変わらず、穏やかに暮らす風情ある閑静な住宅地である。

■ 玉石・生垣と庭木による古いまちなみ



■ 学校の門に残る出水假屋門



■ 歴史の道筋(鬼坂)



■ 五万石溝



② 野田麓地区

野田地区の中心部から薩摩街道出水筋沿いに南にかけて、出水麓の外城として分離・独立して武家のまちとして形成された野田麓地区には、出水麓と同様に、玉石に生垣、歴史的な門や古い家屋からなる歴史的な町並みが約1kmに渡って残されている。

■ 薩摩街道沿いの歴史的なまちなみ



■ 伝統的な武家屋敷の門(薬医門)



③ 出水向江地区

出水麓地区は、武家社会の中では、上級武士が住んだ町であるのに対し、現在の向江地区は下級武士が住んだ麓である。現在でも、麓ほどの規模はないものの、玉石・生垣による歴史的な趣を残している地区であり、風情あるまちなみが形成されている。

■風情ある古いまちなみ



■風情ある古いまちなみ



B. 地域固有の歴史資源

① 薩州島津家に縁ある景観資源

野田地区は、薩州島津家の発生の地であり、島津家縁の歴史的な資源が豊富である。その1つとして、初代から5代目までの墓碑が奉られている鎮国山感応寺は、初代・島津忠久が創建し、臨済宗禅の祖・栄西禅師が開山した日本最古の禅寺であり、島津家の菩提寺として今も地域のシンボリックな寺院である。感応寺周辺には今も古いまちなみが残っており、風情ある佇まいを感じさせる地区である。

また、出水市内には城跡も多く、島津家が築城を命じた木牟礼城や、室町時代に地元豪族をおさえ堅持した山城である高尾野城（紅葉城）などがあり、現在では城跡として保全されている。

■鎮国山感応寺と古いまちなみ



■五廟社(初代～5代の墓碑)



■紅葉城跡(高尾野城跡)



■木牟礼城跡



② 歴史的な道筋

出水市は、肥後藩と接する薩摩藩の入口に位置し、軍事上、重要な役割を担っていた。出水市には薩摩街道・出水筋が通り、その入口は、水俣市との境界に流れる境川にかかる石橋・境橋であり、現在も残っている。

また、肥後から薩摩にかけて最初の関所である野間之関は、薩摩第一級の関所として、その峻厳さをもって全国に知られ、高山彦九郎があまりの出入国の厳しさに書き残した一文「薩摩びと、いかにやいかに、刈萱かるかやの関もとざさぬ世とは知らずや」が有名である。

出水市内の薩摩街道・出水筋沿いには、歴史的な資源や古いまちなみが今も各地に残っている。

■境橋(薩摩街道・出水筋)



■野間之関跡



③ 特攻関連の歴史資源

太平洋戦争下では、出水市内でも他の鹿児島県下の都市と同様に、出水基地において、昭和12年に飛行場の建設が始まり、昭和20年4月以降、出水特攻基地として出撃を行うようになり、多くの若き隊員が南海の果てに散っていった歴史をもっている。その痕跡、現在、旧出水基地飛行場であったゴルフ場やその周辺に、多くの資源を残しており、平和を願うためにも、貴重な地域の資源として保全していくことが必要なものである。

■戦争遺跡・掩体壕えんたいごう



■旧出水基地・気象観測所(現・民家納屋)



■特攻碑公園内に残る地下壕入口



■基地へのメイン通り



C. 歴史的な建物や建造物

① 歴史的な趣のある建築物

高尾野地区にある歴史ある酒蔵には、レンガによる煙突や重厚な石造建築物（倉庫）が残っており、風格と趣きを感じさせる景観資源である。また、隣接した家屋では、重厚な石塀が残されており、かごしまらしい景観をみることができる。

また、近代建築物としては、出水公会堂が残っており、近代建築独特の風合いを感じさせるものとなっている。

■石造倉庫と煙突のある酒蔵(高尾野地区)



■近代建築・出水公会堂



■重厚な石塀(高尾野地区)



② 中山間部に多く残る石橋

山間地には多くの石橋が残っているものの、現在では、そのほとんどが日常的に市民が目にすることはなく、一部には、親柱の崩落などもみられる。

そんな中において、集落の中にあり市民に日常的に使われており、周囲と石橋、川の水面が一体となった風情ある景観を形成しているものや、地域の人々に大切に保全されてきた石橋もみられる。

■保全されている山神橋(高尾野地区)



■瓦落橋



③ 地域に親しまれている寺社

出水市には、市内各地の集落の近隣に、多くの寺社がみられ、季節ごとの祭事に加え、境内の散策や社叢にある豊かな森、シンボリックな鳥居や参道など、日常的に地域の人々が目にし、親しまれている地域資源である。

米ノ津地区にある加紫久利神社など、歴史ある寺社から、近隣の集落の人々の生活に根づいた寺社まで幅広く、集落の人々により、花の手入れ等がなされている例もみられる。

■加紫久利神社(米ノ津地区)



■紫尾神社(高尾野地区)



■箱崎八幡宮



■集落近くの神社



■鎮国山感応禅寺



■西照寺



【4】 市街地、社会基盤に関する景観資源

A. 産業活動の景観

① 商店街の景観

出水麓地区の北に隣接し、門前町として栄えた地区であり、歴史は古く、市民に親しまれている商店街であるものの、現状においては、空き店舗も目立ち、やや賑わいに欠ける商店街となっ
てしまっている。

また、西出水、米ノ津、高尾野など、各地区の中心には古くからの商店街があるものの、国道
447号沿いに立地が進むロードサイド型の大型店の影響も大きく、賑わいに欠けてしまっている。

■栄町の商店街のアーケード



■高尾野駅前の商店街



② 工業団地

出水市には、沖田工業団地、松尾工業団地、高尾野工業団地が整備され、最先端技術産業の進
出（NEC、ヤマト電子等）もあり、製造業を中心に活気がみられる。

■沖田工業団地



■高尾野工業団地



③ 農産物直売所

出水市内には、地域の産物を地域の人やまちを訪れた人が購入できる場が多く整備されており、
地域と産業活動の接点の1つとなっており、市民の交流の場である。

■特産館いずみ(出水地区)



■野田郷村おこし屋



B. 通りの景観

① 街路樹による通りの景観

出水市内の主要な幹線のうち、出水地区では、特攻通りの桜並木や国道 447 号沿いの銀杏並木、出水麓地区から箱崎八幡宮周辺にかけてイヌマキ並木が整備され、それぞれの通りの景観を印象づけている。

■イヌマキ並木



■特攻通りの桜並木(春)



② 市民の手による通りの景観

市民の手により、民地内の道路沿いなどや砂防区域内の土手に、花々を植栽するなどにより、美しい通りの景観を形成している地区がみられる。

■あじさいロード(鍋野)



■あじさいロード(針原地区)



C. 交通環境による景観

① 九州新幹線

2004年（平成16年）3月、新八代～鹿児島中央間での部分開業にともない、新しい出水市の玄関口として出水駅が整備された。2011年春には博多～鹿児島中央間で全線開業が予定されており、出水駅を含む駅周辺地域は、九州北部とを結ぶ出水市の交流拠点として、まちの顔を担う景観資源として捉えることができる。

■九州新幹線・出水駅(西口)



■九州新幹線・出水駅(東口)



② 肥薩おれんじ鉄道

出水駅は、八代駅～川内駅を結ぶ肥薩おれんじ鉄道と九州新幹線が接続する駅の1つで、出水市内には、出水駅、米ノ津駅、西出水駅、高尾野駅、野田郷駅が整備され、田園の中を走る鉄道の景観を見ることができる。

それぞれの駅は、各地区の中心部にあり、駅前には商店街もある。

■肥薩おれんじ鉄道



■イベント列車



■野田郷駅



■高尾野駅



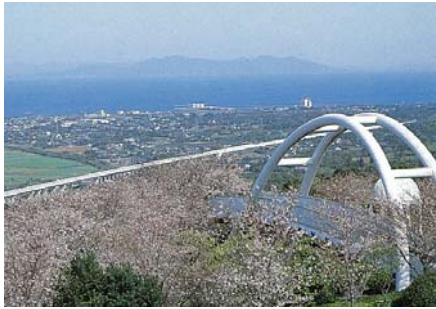
D. 自然を活かした憩いの場の景観

① 季節感のある公園

出水市内には、桜など季節の花を楽しみながら、豊かな自然の中で憩うことのできる公園が各地に整備されており、市民に親しまれている地域資源となっている。

中でも東光山公園や荒崎展望公園などは、市内を眺望できる貴重な視点場となっている。

■桜の咲く東光山公園



■高野山公園



■緑豊かな小原山市民の森



■川平農村公園



② 市民の手による花や緑

出水市には、公共施設として整備された公園以外にも、市民自らの活動により、花や緑による美しい景観を楽しむことのできる場もみられます。

上場高原では、コスモスや菜の花など、季節ごとに市民ボランティアを中心とした花の植栽が行われており、市民に親しまれた季節の風物詩となっている。

■上場高原の季節ごとの花々



■東雲の里(あじさい園、ぼたん園)



③ 温泉地の景観

出水市には山間部を中心に多くの温泉地があり、豊かな自然環境に囲まれた憩い・癒しの場となっている。また、高尾野地区では、市街地や集落近くにも、市民に親しまれた温泉が立地しており、地域の人々の交流の場ともなっている。

■湯川内温泉(かじか荘)



■白木川内温泉



■温泉センターもみじ



■身近な温泉



【5】 祭事・イベントに関する景観資源

A. 歴史的な祭事の景観

① 歴史的・文化的な祭事

出水市には、歴史的・文化的貴重な祭事が今も大事に受け継がれており、地域文化を象徴する景観となっている。

薩摩武士の蛮勇を諷刺した踊りとして紫尾神社の祭礼で奉納される兵六踊り、秋の彼岸に五穀豊穡に感謝し熊野神社に奉納される田ノ神舞、天草一揆鎮圧の出陣時の士気を鼓舞する青木地区の野田山田楽、出水麓地区に伝承される郷土芸能の種子島楽は、県指定無形民俗文化財に指定されている。

■ 兵六踊り(紫尾神社祭礼の奉納)



■ 田の神舞(熊野神社の奉納踊り)



■ 野田山田楽(青木地区)



■ 種子島楽(出水麓地区)



② 地域に根づく民俗文化

地域の歴史や文化に根つき、地域固有の文化として受け継がれてきた民俗文化的な祭事の景観は、季節の風物詩の1つとして市民に親しまれている景観である。

正月明けの飾り等を集めて焼き、無病息災を地域で祈る鬼火焚きの光景や、薩摩藩の領地で行われ、夏場の病気や農作物の病虫害など災厄を払うために、集落ごとに神に祈りを捧げる六月灯など、市内各地で見ることができる祭事の景観である。

■ 鬼火焚き



B. 市民に親しまれる祭・イベントの景観

① 多くの市民で賑わう祭・イベント

出水市では、広く市民に親しまれた祭が季節ごとに多く開催されており、多くの人が集まり、祭を通して賑わいのある景観をみることができる。

鹿児島三大市のひとつである中の市や、市内に多くある寺社による季節ごとの祭事、花火もある夏の一大祭である鶴翔祭など、多くの祭が開催されている。

■ 中の市



■ 寺社による季節の祭



■ 出水ツルマラソン



■ 夏祭り・鶴翔祭



② 地域資源を活かした祭・イベント

歴史的な祭りや、寺社等の祭事とは異なり、市民や市民活動グループ等が中心になり、地域の資源を活かした新しいイベントや取組が行われている。

これらは、地域の資源を活かし、イベントを契機に地域の魅力を高めることにより、地域のみならず市内外を含めた活力づくりにつながる景観となっている。

■ 出水籠祭り



③ 地域の産業と結びついた祭・イベント

出水市では、米、野菜、お茶、みかんやぶどう等、多くの農作物が取れるとともに、歴史ある酒造、植木産業など、多様な産業活動が展開されている。

これらの産業の活力につながる祭やイベントも開催され、地域に親しまれた出水らしい景観となっている。

■ 植木市・出水



■ 植木市・高尾野



■ 大産業祭



■ 大産業祭



出水の景観資源マップ



3. 出水の景観を守り育てるために（景観形成の方向性）

出水市における景観資源をふまえ、市民に親しまれた「出水らしい景観」を守り育てるために、市民と行政が協働して取り組む景観形成の方向性は、以下のように考えます。

1. 出水らしさの素地となる自然景観を守ります

出水平野を包み込むように広がる肥薩山脈や紫尾山系、笠山などの雄大な山々の景観、市街地の前面に広がる広々とした不知火の海と島々、そこに注ぐ米ノ津川や高尾野川、野田川と広々とした出水平野の景観は、出水らしさを形づくる骨格であり、出水市の景観の素地となっています。

これらは日常的に当たり前目にしている景観である一方で、市民にとってふるさと出水を印象づける素地となる大切な景観であり、骨格となる自然景観を守るための取組が必要です。



■景観形成の取組イメージ（例）

- まちを取り囲む山々の緑を保全する
 - 市街地の背景となる山々と調和した市街地・集落景観を形成する
 - アユや野鳥の見られる清流の環境を保全する
 - 海岸や河川において、市民が水辺に親しめる環境を形成する
 - 東光山公園や荒崎展望公園からの眺望景観を保全する
- 等

2. ツルの舞う広い空と農地からなる環境豊かな景観を守ります

秋から春にかけてシベリアより飛来するツルの群は、出水の冬の風物詩であるとともに、広い空のもと市内を悠々と飛来するツルの姿や、干潟や農地で餌をついばむツルの姿は、昔から変わらない出水市のシンボリックな景観となっています。また、近年では、ツルだけでなく、多くの貴重な野鳥の姿も見ることができ、これらは出水市の豊かな環境が変わらず維持されていることを背景として、見ることができる景観です。

「ツルの舞う景観」を鍵とした、広々とした空、広々とした農地、豊かな干潟や水辺環境を守り、自然と人間が共生したまちづくりの証となる景観を形成するための取組が必要です。



■景観形成の取組イメージ（例）

- 貴重な干潟環境や水辺環境を保全する
- ツルと共生し続けられる農業環境を形成する
- 電線類を地中化し、広々とした空を取り戻す
- 派手な色彩の建物等をなくすなど、自然と調和した市街地景観を形成する
- 荒崎干拓地から見えるツルと農地、山並みと集落の景観を一体的に保全する 等

3.暮らしによりそう、生業と地域文化からなる景観を大切にします

干拓地を中心とした広々とした田園では、夏には一面の緑の絨毯が秋には黄金色に変わり、収穫期には昔ながらの掛け干しの景観もみることができるとともに、米ノ津を中心とした丘陵地のみかん畑や、出水や高尾野での畑地での苗木・植木業、緑濃く整然と整備された茶畑など、恵まれた農業環境を象徴した特色ある生業の景観を見ることができます。

また、八代海では海苔の養殖、ケタ打瀬船によるエビ漁など、伝統的な水産業による景観もみられます。

このような生業の景観は、地域産業の活力を感じさせるだけでなく、季節の訪れとともに変化する生きた景観であり、また田の神様や豊穰祭などの地域固有の文化とも結びついた市民の暮らしとともにある景観として、大切に育み、継承していくための取組が必要です。



■景観形成の取組イメージ（例）

- 持続的な産業活動（農林業・水産業）を展開し、活力を維持する
- 景観上の特徴を活かし、産業を活性化する（棚田米、景観作物、地域ブランド等）
- 身近な地域の景観を見直し、地域資源を発掘する
- 地域固有の文化を市民で共有し、次の世代へ継承する

等

4. 地域の歴史を大切にし、出水らしい文化の薫る景観を形成します

出水市内には、歴史的な道すじである薩摩街道・出水筋沿いを中心に、薩州島津に縁のある歴史的な資源が多く残るとともに、玉石・生垣からなる印象的な武家屋敷の名残を残す歴史的なまちなみが出水麓や野田麓をはじめ、市内各地に残っています。また、麓等の古い集落の近くには歴史的な寺社も多く、季節ごとの祭事や緑豊かな森や林とともに、古くから地域に親しまれている風情ある景観を形成しています。

一方で、出水麓の門前町であり商店街や地域の中心部の商店街では、かつての賑わいはなく空き店舗も増えており、魅力ある地域づくりによる賑わいの再生が課題となっています。

地域固有の歴史を背景とした魅力づくりにより、出水らしい文化の薫る景観形成の取組を進めることにより、賑わいと活力あるまちづくりにつなげていくことが必要です。



■景観形成の取組イメージ（例）

- 歴史的・文化的なまちなみを保全・継承する
- 地域の景観と調和した風情と魅力ある景観を形成する
- 地域に点在する歴史資源を大切に保全する
- 歴史的な資源を地域の活力づくりに活かす
- 歴史的な道すじを活かし、市内の歴史資源を回遊できる取組を展開する 等

出水市では、この4つの方針を景観形成の柱とし、市民とともに景観形成の実現に向けた取組について考えるとともに、市民・事業者・行政が協働して、市民一人ひとりが誇りと愛着をもてる「出水らしい景観」の保全・形成の方針策定に取り組みます。

4. 他地域の事例（参考）

① 沖縄県石垣市における景観計画：「風景づくりを通じた持続可能な地域づくり」

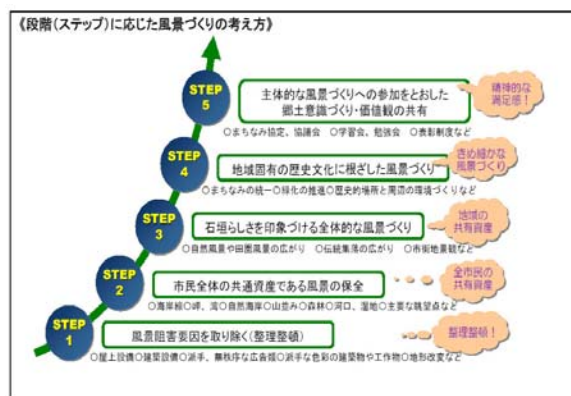
（背景）石垣市は豊かな自然環境（自然・動物など）を背景とした美しい自然風景に恵まれ、かつ歴史文化に根ざした先人から受け継いだ独自の文化的景観が随所に見られる景観資源の宝庫である。しかしながら、社会情勢の変化、とりわけ沖縄ブームや移住ブームに端を発する景勝地での建築行為の増加などが、手つかずの自然景観を脅かそうとしている。また新空港の着工や増加する観光客を背景としたリゾート開発の兆しが多く見られるようになり、これまで保ってきた景観が崩れつつある現状がある。

（計画の特色）景観計画による一定の行為に対する緩やかな規制誘導はもちろん、石垣市がこれまで守り培ってきた独自性のある風景をこれからも守り育てるためには、開発と保全のあり方を島全体が考え、島民一人ひとりが生活様式や土地利用のあり方を見つめなおすことが重要とし、自然環境の保全や地域振興、観光産業振興との関わり、市民の共感を生むための学習会、勉強会の開催など、幅の広い多様な視点での計画となっている。

（少しずつ進んでいく景観まちづくり）

計画が目標とするのは、おおむね20年後としている。美しい島の将来像へ向けた、段階的な風景づくりの取り組み方針を以下のように示している。

- 第1段階 整理整頓を心がけるだけで風景は格段によくなります。
- 第2段階 誰もが納得する市民共通の風景資源を守ります。
- 第3段階 石垣島を内外から印象づける“石垣らしい”風景資源を守り、直します。
- 第4段階 各字、町内、集落など地域が愛する、残したい、創りたい風景づくりを心がけます。
- 第5段階 市民、事業者及び行政にとり風景づくりが日常化し、風景づくりが内部目的化します。



（景観計画の内容）

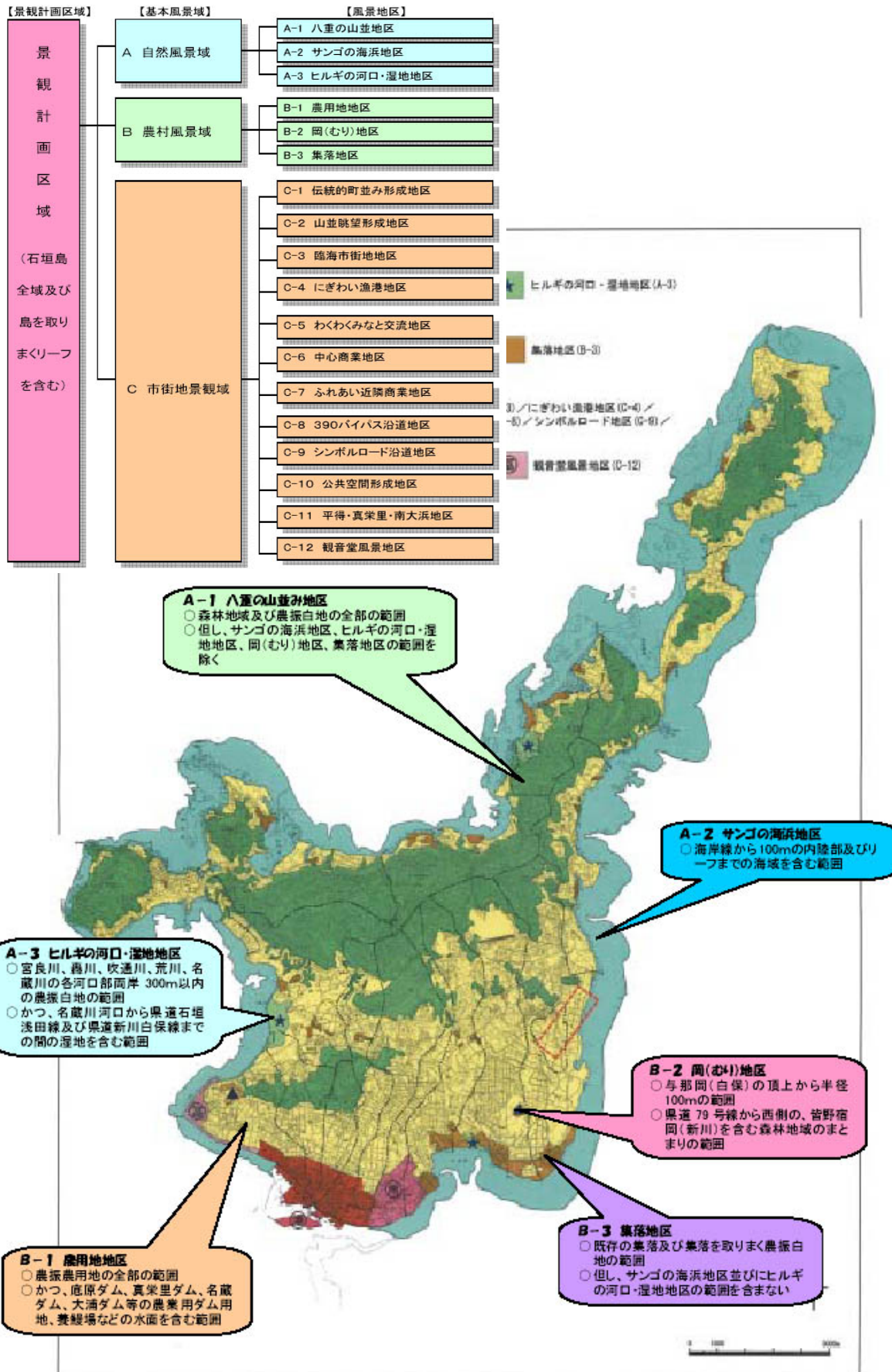
景観計画区域：『石垣島全域及び島を取りまくリーフを含む』と指定

基本風景域（ゾーニング）：大きなゾーニングとして島を3つの風景域（自然・農村・市街地）に区分し、それぞれの基本風景域を土地利用の規制・現況、風景の特性に応じて18の風景地区に分けている。

風景地区の特徴：計画では18に区分された風景地区に応じた良好な景観の形成のための方針、並びに景観形成規準を定めている。ほとんどの建築行為を届出制にするほか、工作物や開発行為などにあらかじめ誘導規準を設けてあり、事業者との事前協議を通してより良い風景の創出を図るしくみをつくっている。

（今後の展開）石垣島の一部が新たに「西表石垣国立公園」として国立公園に指定され、その豊かな自然と歴史文化に培われた美しい風景の保全は、市の将来にとってもっとも重要なテーマとなっている。島の自然の特徴から本土復帰からの歴史を踏まえた景観法を活用した景観計画のさらなる展開が期待されている。

景観計画区域と18の景観地区



② 東京都世田谷区における地域風景資産選定の取組み

：「住民を巻き込む風景づくり」

(背景) まちの“風景”は規制や誘導ではなしえられず、周辺環境との調和や賑わいがあることによって感じることができる。地域固有の風景を育むためには、場所と人とのかかわりが垣間見られる生活景にヒントがある。“世田谷区風景づくり条例”における地域風景資産選定の取組みは、地域住民個々の観点を重視した住民・行政協働の取組みである。

(特色) 景観百選など地域資源を発見したり評価する試みは全国の自治体で行われているが、その多くは選定で終わっている。世田谷での取組みの特色は、選定で終わらせずに活動を伴う風景づくり活動へと展開するところにある。

(選定の基準～何を大切にしているか～) 条例では地域風景資産の定義や選定方法、選定基準の具体的な内容については触れられていない。公募で集まった区民の集まりである「風景づくりフォーラム」において、具体的な内容の議論を行った。

地域風景資産選定の4つの条件

1. 風景としての資産の価値がある
2. 地域の共感・共有がある
3. 風景づくりにつながるアイデアがある
4. コミュニティづくりにつながるアイデアがある

(選定のプロセス) 具体的な選定プロセスは、大きくは推薦者がサポーターと風景づくりプランを作成する第一段階、選定人がプランを現場で地域住民と確認し、選定評価を行う第二段階、公開の場で審査人が審査し選定する第三段階の3つに分けられる。

このようなプロセスを実行するにつれ、地域風景資産に関わる人が増え、選定後も多くの人々を巻き込みながら着実に増え続けている。

① 地域風景資産の選定に関わる人

地域風景資産の選定のしくみづくりに住民が関わることでたくさんの人が選定の役割を担った。

② 風景づくりの活動当事者として関わる人

風景づくり活動が進展する中で、しくみづくりの段階では想定していなかった風景づくり活動に関わる人も増えている。

③ 地域風景資産のファン

パソコンを使って試算の絵葉書を作成する人、ビデオを撮影する人



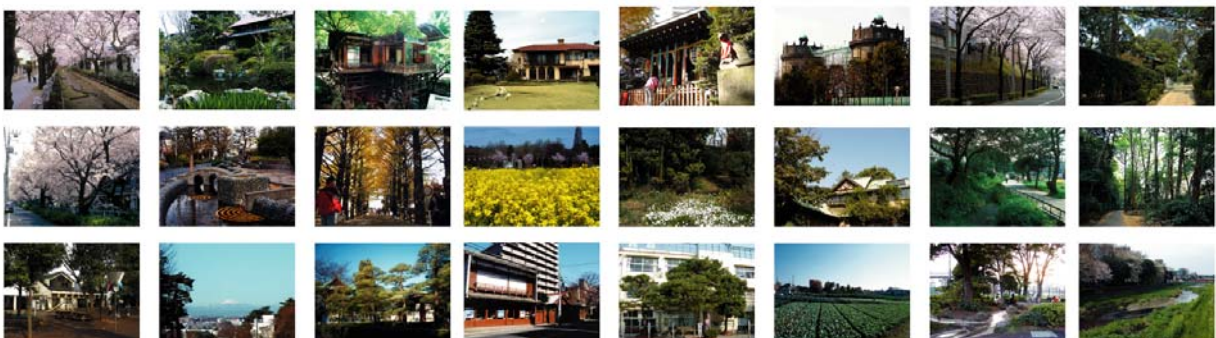
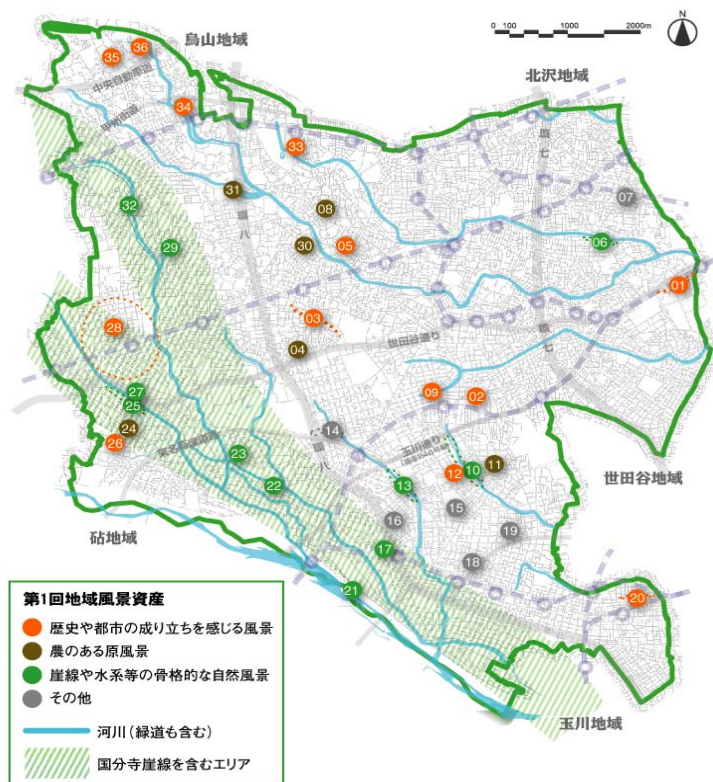
図2 第1回地域風景資産の選定を担う役割



(選定された地域風景資産 36 件) これらのプロセスを経て、36 件の地域風景資産が平成 14 年 12 月に選定された。選定された地域風景資産の特徴としては、いわゆる景観的にすぐれたものばかりではなく、景観的には全区的な魅力を持たなくても、地域の人々が歴史を調べたり、お祭りで地域の名称を使ったグッズを開発・販売するなど、地域の魅力を掘り起こしながら将来の風景づくりにつなげていくもの。周辺の既存コミュニティ（町会や協議会）等と連携しながら、資産周辺の開発とも協議をはじめているもの。世田谷まちづくりファンドなどの、既存の支援制度のしくみを活用しながら、風景づくり活動を展開するものなど、様々な方法で風景づくり活動が展開している。単に、訪れていいと感じるだけの風景ではなく、そこにいる人たちの活動を含めて風景に育っているというのが、地域風景資産の特徴といえる。

しかし、選定後、ほとんど活動がないという物件もあり、ハードな一連の選定プロセスを経ても、実際に活動が進んでいる物件の誕生率が 1 割程度だとすると、この数値を低いと考えるか、十分と考えるかは今後の評価が必要となるのである。

地域風景資産マップ

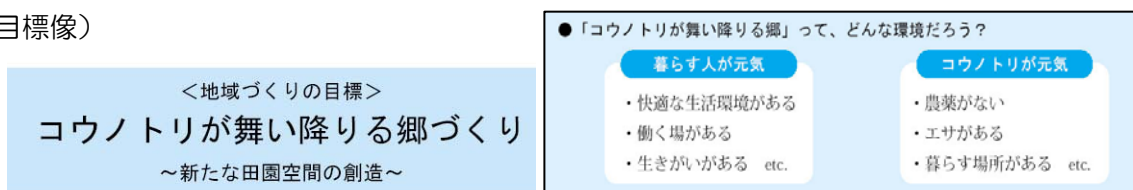


③ 兵庫県豊岡市におけるまちづくり構想：「コウノトリとともに育むまちづくり」

(背景) 豊岡市では、コウノトリと共生する地域づくりをめざし、コウノトリの野生復帰に向けた基本方針、放鳥の方法、環境整備、普及啓発等に関する総合計画「コウノトリ野生復帰推進計画」並びに同計画と連携し、県立コウノトリの郷公園周辺地域をエコミュージアム手法で先導的に整備する「コウノトリ翔る地域まるごと博物館構想・計画」について、それぞれ協議会等を設置し検討を進めている。

(概要) 県立コウノトリの郷公園周辺地域を対象に、人と自然が共生する地域づくりを実現するためのモデルとして、エコミュージアム手法により「コウノトリ翔る地域まるごと博物館」の展開を図り、将来的に、より広範な地域への普及を目指していく。

(目標像)



(特色) 計画が掲げる6つの目標の一番目に“景観”を位置づけている。概要は以下の通り。

目標1 コウノトリが似合う田園景観づくり

・地域の自然と調和した美しい田園景観を守ると共に、コウノトリが暮らせる環境を探ることにより、コウノトリが舞い降りる郷にふさわしい「美しい村づくり」「美しい里山づくり」を進める。

●景観づくりの基本的な考え方

地域の自然や風土に根ざした、魅力的な田園景観の創出をめざします。具体的には、以下のような点に留意した景観形成を図ります。

- ・地域の植生をできる限り取り入れます。
- ・地域の伝統的な建築に調和するデザイン、色彩を重視します。
- ・人とコウノトリをはじめとする様々な生きものにとって、暮らしやすい空間の実現に努めます。

●自然再生による整備

自然と調和した美しい景観づくりにあたっては、地域に根ざした自然を保全・創造することが必要です。このような自然再生活動を通じて、「目にやさしい風景」「生きものを育む風景」「心に響く風景」などを再生していきます。

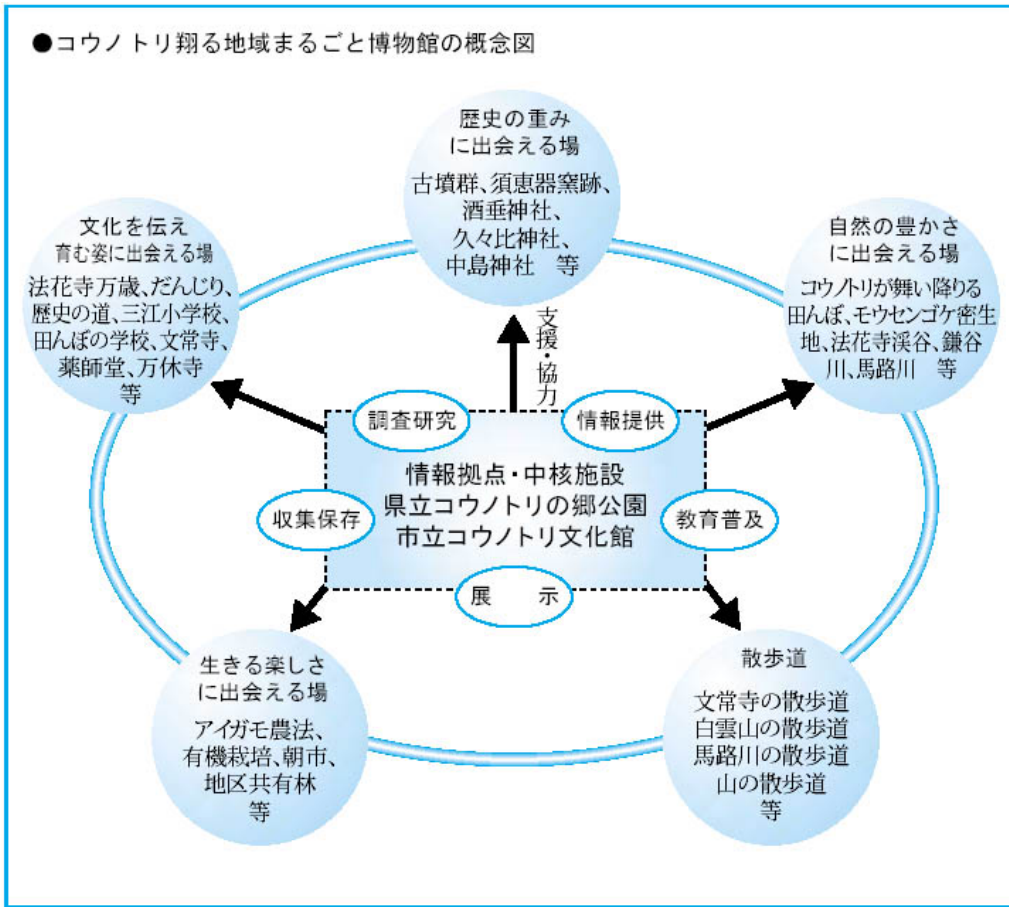
- ①田畑：安全で豊かな農産物に加え、花を楽しめる植物を植栽し、かつての水田で見られた、花に彩られた美しい田園景観を再生していきます（ヒガンバナ、ナノハナ等）。
- ②里山：地域の植生を復元し、継続的な手入れを行っていくことにより、地域らしい、美しい里山を再生していきます。
- ③河川：過去に損なわれた生態系や自然環境を取り戻すため、生きもののバリアフリーを実現する魚道や、護岸の再自然化、湿地の再生など、コウノトリや多様な生きものを育む河川・水辺の整備に努めます。

●生活空間での景観づくり

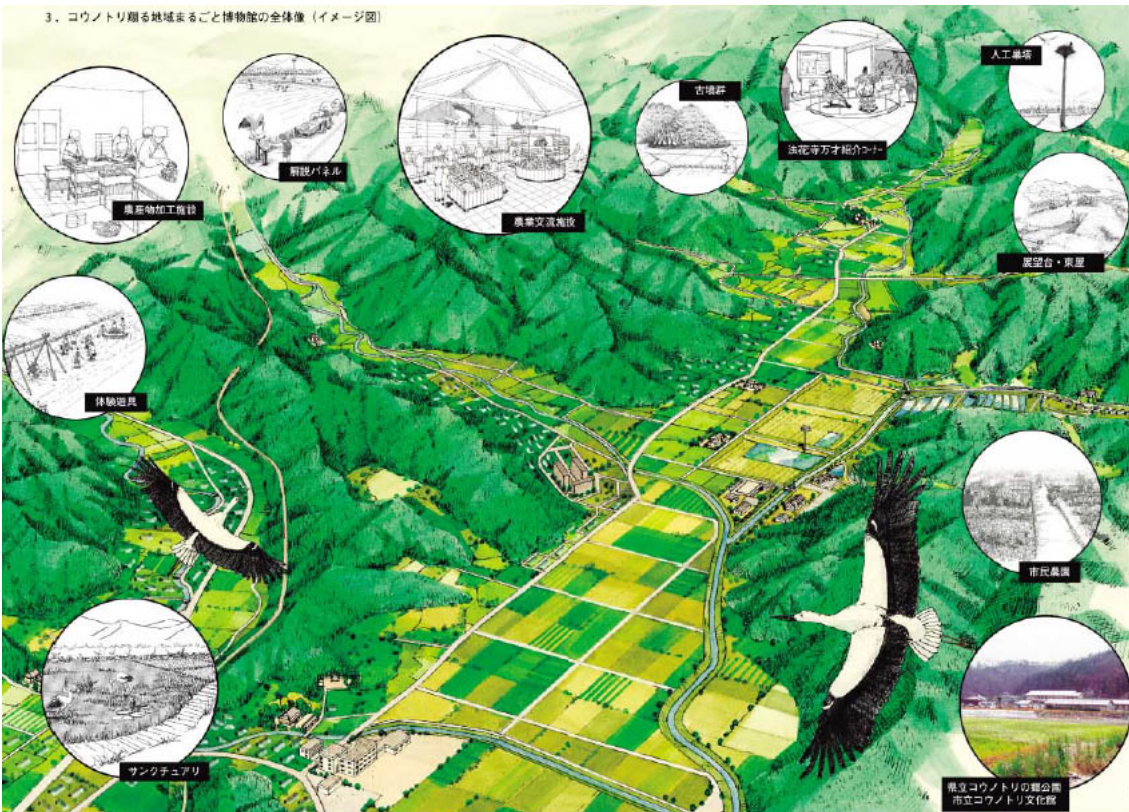
生活空間での景観づくりは、地域住民と行政とが協力して取り組むことが大切です。

- ①美しい村づくり：庭先や沿道、農道などでの植栽や草刈りなどを行います。
- ②電線類対策：美しい農村景観の実現に向け、電線や電柱に対する修景に努めます。
(電線の地中化・低層単線化、電柱の移設・擬木化 等)

概念図



3. コウノトリ翔る地域まるごと博物館の全体像 (イメージ図)



④山口県萩市の萩まちじゅう博物館：「まちに見え隠れする物語を大切にする」

(背景) 現在、この都市遺産・萩を物語る「土塀から顔を出す夏みかん」、「古い町家が続くまちなみ」、「萩の歴史を見守ってきた松の古木」といった代表的な風景が、都市化の波により徐々に失われつつある。現在の萩のまちには、様々な人工色が溢れ、商用看板が氾濫している。「萩のまち」の保存運動を展開していく上で、望めば意のままに色やデザインを選択できる現代でこそ、都市遺産・萩にふさわしい選択が何であるかを、行政そして市民一人一人が常に考えて行動することが求められている。

(概要) 「まちじゅう博物館」とは萩の町全体を博物館ととらえる観光地づくり、まちづくりの取り組みである。歴史的な町並みを近代化という名の破壊から守るという目的で展開されている。城下町萩には、たくさんの文化財をはじめ、「まちじゅう」に豊かな文化や歴史、自然の「おたから」がある。

それらの「おたから」を、現地でありのままに展示・保存されている資料と考えると、萩のまちは、まるで屋根のない広い博物館＝「まちじゅう博物館」とみなすことができる。「萩まちじゅう博物館」は、萩の魅力を萩にすむ人々が再発見するとともに、かけがえのない「萩のおたから」を守り育てながら、誇りをもって次世代に伝えていこうとする新しいまちづくりの取り組みである。

(取組み内容)

「おたから」：萩に住む人々が子どもたちや訪れた人々に伝えていきたいと思う、萩のまちじゅうの歴史や文化、自然や民俗など、そこに物語をもつものを「おたから」と呼んでいる。

	一般例	萩の例
自然のおたから	海、島、山、河川、湖沼、森林など	日本海、阿武川、ホルンフェルス、昆虫王国、長門峡、ひまわりロード、東風巖山、指月山、椿群生林、松の古木
文化のおたから	町並み、建造物、古墳、生活文化、祭りなど	西堂寺六角堂、萩往還、森田家住宅、明木市の町並み、佐々市の町並み、武家屋敷、長屋門、石垣、土塀
産業のおたから	地場産業、伝統工業、鉱山跡、農場など	平巖台、種田、夏みかん類、萩焼、須佐焼、反射炉、蒸気まんじゅう、いりこ工場、かまぼこ工場

①研究・保存

- おたからをデータベース化し、それを管理する活動
- おたからを再発見・新発見する活動
- おたからを保存・保全し、見守る活動

②展示・情報発信・活用

- 地域を屋根のない博物館ととらえ、現地でありのままにおたからを展示する活動
- おたから情報を通して萩の文化を解説（インタープリテーション）する活動
- おたから情報を発信・公開する活動
- おたからの特性を生かした公共空間づくり

③拠点整備と周辺整備

- まちじゅうへの出発点、情報拠点（コア）として萩博物館を整備すること
- 地域にあるおたからやその場所をまちじゅうの展示室（サテライト）として整備すること
- サテライトを様々な物語でめぐる散策路「発見の小径」（トレイル）を整備すること

④「心のふるさと・萩」のおもてなし

- 萩を訪れた人々が「もう一度萩に行きたい」と思うような、彼らを迎え入れた市民が「萩に住んで良かった」と日々思えるようなおもてなし活動

(最近の取組み)

●ワンコイントラスト

萩市とNPO萩まちじゅう博物館は、萩市のまちづくりの基軸となる萩まちじゅう博物館を推進するため、協働でワンコイントラスト(100円信託)運動を展開することとなった。観光客や市民の皆さんから寄せられた信託金により、萩の文化遺産を大切に保存・活用し、萩にしかない宝物を次世代に伝えていこうとするもの。

●萩ものしり博士検定

萩のことをより広く・深く知っていただくための検定。まちじゅうにある豊かな自然や歴史、文化のおたからと、それにまつわる物語をクイズ形式で学べるようになっていく。この検定が「萩」に対する知識を豊かにするとともに、萩のまちやそこにあるおたからを再発見し、「萩まちじゅう博物館」というまちづくりの取組みに展開していくことが期待されている。

●筋名復活のとりくみ

1604年に毛利輝元により開府された萩城下町は、幕末に藩庁が山口に移るまでの260年余り、長州藩36万石の中心都市として栄えた。城下町が発達するにつれ道路網も整備され、道や小径にはその土地に因んだ筋名がつけられた。以来、萩のまちで場所を表すときは筋名が使われてきましたが、近年あまり使われなくなった。

「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」と言われる萩のまちで、市民が慣れ親しんだ筋名を復活することにより、萩に暮らす人々には「萩の歴史と誇り」を再認識し、また萩を訪れた人々には世界的遺産である萩城下町の風情や情緒を感じることで「萩まちじゅう博物館」を推進している。

●まち歩きマップ

